群馬県無形文化財緊急調査報告書

群馬県教育委員会編

小正月のつくりもの(一)

——吾妻編——

序文

近年における急激な生活様式・慣習の変化は、わが国伝統の生活構造や民俗行事などを大きく変貌させ、特に、比較的古くからの生活のなごりが残っているとみられる農山村部においては、それが顕著になりつつあります。

本県は山地の多い内陸的な風土で、養蚕を中心とした農業を主たる生業としてまいりました。「小正月のつくりもの」は、そうした本県の特色と密接なかかわりをもって広く行われてきました。

新暦の大正月に対して小正月には、一年の農耕始めとして、古くから豊作祈願のための数多くの予祝行事が集中しております。「小正月のつくりもの」もその一つで、「つくりもの」を模擬的に作って神々に供え、豊作を祈願するというものです。

本県では、主に農山村部一帯で広範囲に行われている習俗で、「つくりもの」の数や種類も豊富であり、マユダマ・ケズリバナをはじめ、その他、カユカキ棒・ハラミバシ・粟穂稗穂（アワボヒエボ）・各種木像類など、誠にバラエティーに富んでおります。

しかし、最近こうした製作に携わる人々も高齢化し、また、年々製作技術者の減少が進行しております。

そこで、県教育委員会では、無形文化財の緊急調査を昭和六十年度より従来の調査方法を多少変更し、四年計画という長期的見通しのもとで、県内の「小正月のつくりもの」の調査を実施することにしました。昭和六十年度は吾妻地方、六十一年度は西毛地方、六十二年度は利根地方、そして最終年度の六十三年度は中・東毛地方、という年次計画であります。

今回、本報告書に収録しました吾妻地方の「つくりもの」は、県内では数・種類ともに最も豊富な地域であり、製作技術はもとより、その作品は造型的にも優れております。本報告書が、民俗研究者をはじめ、多くの方々に活用され、無形文化財の保護と継承の御理解に少しでも役立てていただけますことを切望するものであります。

本調査の実施にあたりましては、関係町村教育委員会・調査員の方々など、多大な御協力をいただきました。とりわけ、年末・年始という多忙な中にもかかわらず、快く調査に応じていただきました調査対象者の方々に対しまして深い敬意と謝意を表するしだいであります。

昭和六十二年三月

群馬県教育委員会教育長　千吉良　覚

目次

序文
目次
無形文化財緊急調査実施要綱……1頁
〈総論〉
吾妻地方の「小正月のつくりもの」……4
一、はじめに……4
二、吾妻川流域の特色……4
三、おわりに……8
〈各論〉
山本直義家の「つくりもの」……9
一、概観……9
二、山入り……9
三、木の種類……10
四、作る日・場所・道具……10
五、ものつくり……11
六、お飾りかえ……13
七、小正月行事とのかかわり……14
中沢一孝家の「つくりもの」……15
一、概観……15
二、山入り……15
三、木の種類……16
四、作る日・場所・道具……16
五、ものつくり……16
六、お飾りかえ……18
七、小正月行事とのかかわり……20頁
滝沢正男家の「つくりもの」……21
一、概観……21
二、山入り……21
三、ものつくり……21
四、お飾りかえ……25
五、小正月行事とのかかわり……25
六、「つくりもの」の処分……26
七、おわりに……26
星河義一家の「つくりもの」……27
一、概観……27
二、山入り……27
三、ものつくり……27
四、お飾りかえ……30
五、小正月行事とのかかわり……31
六、「つくりもの」の処分……31
七、おわりに……32
野口保雄家の「つくりもの」……33
一、概観……33
二、山入り……33
三、木の種類……34
四、作る日・場所・道具……34
五、ものつくり……35
六、お飾りかえ……38
七、小正月行事とのかかわり……41

小池喜次郎家の「つくりもの」……42頁
一、概　観……42
二、山入り……42
三、木の種類……42
四、作る日・場所・道具……43
五、ものつくり……43
六、お飾りかえ……46
七、小正月行事とのかかわり……49
唐沢姫雄家の「つくりもの」……50
一、概　観……50
二、山入り……50
三、木の種類……50
四、作る日・場所・道具……51
五、ものつくり……51
六、お飾りかえ……54
七、小正月行事とのかかわり……56
松井次郎家の「つくりもの」……58
一、概　観……58
二、山入り……58
三、木の種類……59
四、作る日・場所・道具……59
五、ものつくり……59
六、お飾りかえ……62
七、小正月行事とのかかわり……64
石川広吉家の「つくりもの」……66
一、概　観……66
二、山入り……66
三、ものつくり……66
四、お飾りかえ……70
五、年とり（十四日年）……71
六、道祖神とドンド焼き……71
七、十五日粥と「つくりもの」……71
八、マユダマカキと片づけ……71
九、養蚕と「つくりもの」……72
十、稲作と「つくりもの」……72
十一、その他……72
十二、まとめ……72
後藤省三家の「つくりもの」……74
一、概　観……74
二、山入り……74
三、ものつくり……75
四、お飾りかえ……79
五、年とり（十四日年）……80
六、道祖神とドンド焼き……80
七、十五日粥（小豆粥）……80
八、マユダマカキと片づけ……80
九、養蚕と「つくりもの」……81
十、その他……81
十一、まとめ……81
編集後記……82

無形文化財緊急調査実施要綱

1. 趣　旨

本県には多種多様の無形文化財が存在しているが、社会生活の変化により急速に消滅しようとしている。

そこで、特に重要なもので、緊急に保存対策を講じなければならない無形の文化財について、調査のうえ記録を作成し、保存対策の基礎資料を得る。

2. 調査対象

「小正月のつくりもの」

元旦を中心とした大正月に対して、正月十五日前後の小正月には古くから豊作祈願の一方法としての豊作予祝行事が集中している。その一つとして小正月のものつくりの行事がある。小正月を迎えるにあたってものつくりをして飾りかえを行うこの行事は、地域によって「ものつくり」・「飾りかえ」など様々な呼称で呼ばれ、実際につくられるものの種類も豊富である。

マユダマ・ケズリバナは「つくりもの」の代表的事例であるが、その他県内では粟穂稗穂（アワボヒエボ）、俵、農道具一式、木刀類、ドウロクジン（道陸神）をはじめとする各種木像類、カユカキ棒、ハラミバシなどの製作が知られ、それらの地域的特色も著しい。

これらの製品は庶民の生活と密接なかかわりをもちながら今日まで人々に親しまれてきたが、近年ではそれらの製作に携わる人々も減少し、作品の種類も減少しつつある。

そこで、現在残存している製作技術を中心に、事例ごとに（特定の個人の家ごとに）、「小正月のつくりもの」全てにわたって調査する。

3. 調査主体者　　群馬県教育委員会

4. 調査計画

(1) 調査期間

昭和六十年度より昭和六十三年度までの四年計画。

(2) 調査地域

県下全域であるが、各年次ごとの調査地域は以下のとおりである。

○昭和六十年度（第一年次）　吾妻地方
○昭和六十一年度（第二年次）西毛地方
○昭和六十二年度（第三年次）利根地方
○昭和六十三年度（第四年次）中・東毛地方

※　なお、詳細は別掲地図を参照。

(3) 調査員（昭和六十年度）

阪本英一　県立図書館専門員

阿部　孝　前新治村立入須川小学校長
奈良秀重　中之条町文化財調査専門委員長
神宮善彦　県立歴史博物館学芸員
井野修二　前橋市教育委員会社会教育課主任

(4) 調査対象者（昭和六十年度）

○六合村
山本直義（吾妻郡六合村入山世立二七六七）
中沢一孝（吾妻郡六合村入山荷付場三九八六）

○嬬恋村
滝沢正男（吾妻郡嬬恋村門貝二二二）

○長野原町
星河義一（吾妻郡長野原町林三六九）

○吾妻町
野口保雄（吾妻郡吾妻町松谷三七三〇）
小池喜次郎（吾妻郡吾妻町松谷五八二）

○中之条町
唐沢姫雄（吾妻郡中之条町五反田一六七三）
松井次郎（吾妻郡中之条町大塚八四五）

○小野上村
石川広吉（北群馬郡小野上村村上二二四二）

○子持村
後藤省三（北群馬郡子持村上白井三六九四）

5. 調査内容

(1) 特定個人の家ごとに「小正月のつくりもの」全てにわたって、その種類・技術・特色などについて調査する。

(2) 伝統と製作技術の継承

6. まとめ

(1) 調査資料・図面・写真などの作成・保存。

(2) 各年次ごとに調査報告書『小正月のつくりもの』を発行する。

無形文化財緊急調査（小正月のつくりもの）年度別調査地域図

≪総　論≫

吾妻地方の「小正月のつくりもの」

一、はじめに

一般的にはケズリカケ（削り掛け）と呼ばれる木幣は、本県ではハナ・ホダレと呼ばれ、一段・二段・三段・八段・十二段・十六段と多様なものがあり、使用される木にもニワトコ・コメゴメ（キブシまたはミツバアオイ）・ヌルデ・クルミ・ミズブサ（ミズキ）など多様なものがあって、県内をある程度区分けすることもできるようである。このハナを中心として、カユカキ棒、ハラミバシ、アワボ・ヒエボ、アワ俵・ヒエ俵（または福俵）、道祖神、作男・作女、案山子神などの木像、農具のミニチュア、さらにはカタナと呼ばれる木刀などこれらをまとめて「小正月のつくりもの」と呼ぶが、これらは正月初めの「山入り」と呼ばれる行事で初山入りし、山から「つくりもの」に使用する木を切って来て、十一日または十二日、十三日に細工をし、「農の正月」と呼ばれる小正月に供えられたり、飾られたりする。

本県の「小正月のつくりもの」は、その種類の豊富さと地域的広がりなどの特色において、全国的にも注目されるもので、これまでに群馬県立歴史博物館に収集されたコレクションは、昭和五十八年二月二十二日付けで群馬県重要有形民俗文化財に指定されている。

今回の調査は、県下を「つくりもの」の特色などを考慮して四地区に分け、その第一回目として吾妻川流域に焦点をあて、十戸の事例を調査して報告するもので、考察を加えることはしていない。

二、吾妻川流域の特色

(一)　地　域

吾妻川流域としては、吾妻郡八か町村と北群馬郡小野上村・子持村の二か村を加えたが、それは地勢的な面と「つくりもの」のつながりを加味している。この地域は、群馬県北西部にあたり、ほぼ中央を吾妻川が貫流し、吾妻渓谷で西吾妻と東吾妻が分けられ、岩井洞あたりで吾妻川下流の地域とが分けられ、小野上村・子持村は谷口として関東平野の西端に連なっている。

この地域は西に長野県と接し、歴史的にも地理的にも信州とのつながりが深く、いろいろな面にその影響が感じられている。たとえば諏訪信仰・道祖神信仰などがそれで、「小正月のつくりもの」の中でも、道祖神の木像など長野県とのつながりでみる必要がある。

(二) 「小正月のつくりもの」の特色

① ハナ（ホダレともいう）の材料

吾妻川流域では、嬬恋村・六合村の例を除いて、ハナの材料として、コメゴメ（キブシ）・ミズブサが中心になっている。コメゴメは、一段（ナゲバナ）・二段・三段のハナや八段のもの二本合わせての十六バナに使われている。ミズブサ（ミズキ）は、ホダレとかクルマバナ・ノシなどに使われている。勿論ニワトコも子持村や中之条町で使われており、六合村ではヌルデを使用しているが、全体としてはコメゴメ・ミズブサ圏である。

② アワボ・ヒエボ

ヌルデの木を切って笹竹に七夕飾りのように飾ったり、竹を割って折り曲げたものにさして万灯のように飾る。アワボ・ヒエボはほぼ全域に見られ、その名の通り粟・稗の豊かな実りを願う「つくりもの」であるが、コメ穂ではないところにも示されるように畑作の呪物であろう。今回の調査では記録し得なかったが、正月十四日の深夜、主人夫婦が裸になってイロリのまわりをまわって豊作を祈る行事が別の調査で六合村・子持村で記録されている。吾妻町では、アワボ・ヒエボの中央にハナを二本さし、これと長野原町の例では、竹にさす穂にハナ（ケズリ）をつけている。

③ タワラ

アワボ・ヒエボで作物の実りを表わすだけでなく、収穫した作物の俵作りをしたものを作って供え、神様に念を押すものとしてアワ俵・ヒエ俵を作ることが多い。小野上村では、土間に俵作りしたマキを二俵積み上げた上に地神様を祀り、他の例では釜神様に農具をそえて供えられる。

④ 作男・作女

吾妻町の野口家で作られる作男・作女は、小さなものであるが注目されるものである。どの家でも作るものではないというが、作大将だという家もあって、正月様に上げる例もあるが釜神様に上げることもある。作神としての釜神様に上げると言われる。

⑤ 案山子（カカシ）神

六合村の山本家で作られる案山子神は、他に例をみないもので、近年まで田のなかった山村の作神信仰を示している。一般にカカシは田の神を表わすものとみられているが、この案山子神は、十四日に作って神棚に上げ、年とりに飯を供えて、翌十五日の朝、畑へ持って行くがこれを一年中神棚に上げておき、翌年の正月に新しいものと取りかえ、その後に畑へ持参する家、畑へ持って行かずにオンベヤア（ドンドン焼き）に持参する例などがある。畑へ出す場合は畑の中の石の上に乗せ、ハナ一本をそえて拝んで来る。そのままにして自然になくなるのを待つが、ここには畑作農民の地神信仰がみられる。

⑥　道祖神の木像

これこそ吾妻らしい「つくりもの」で、これまで東村を除く七か町村でその存在が記録されている。ヌルデを輪切りにして皮をむき、道祖神と書いただけのものから、切り込みを入れて胸をえぐり、顔を描いて仕上げるものなどいろいろあるが、双体道祖神像と共通するように男女二体で一組とし、一夜客として十四日の夜に供えもの（嬬恋村では膳立てをする）をしてからドンドン焼きに持参し焼くが、中之条町唐沢家の場合のように、ドンドン焼きの火でまっくろに焦がしたあとかき出して、道祖神の石像に供える例もある。六合村の中沢家や山本家ではそのまま道祖神像に供える。

⑦　農　具

ヌルデを割って細工して、農具のミニチュアを作って釜神に供えることは、嬬恋村・長野原町・吾妻町にみられる。特に吾妻町の野口・小池両家の例が注目される。野口家の場合、エンガ・テンガ・ノコギリなどの他に肥桶・肥柄杓などを作り、ワラを束にしたものにさして仕上げる。小池家では、エンガ・テンガの他にマンガ（馬鍬）や臼・杵を作り、麻紐でひとつながりに結び合わせて釜神様に供える。臼には「釜神大明神」と書くことにしている。野口家では、作男・作女を作るが、小池家では作らない。しかし、アワ俵・ヒエ俵と言い、農具、作男・作女ともに釜神様に供えていることは作神としての釜神信仰を表わしているといえよう。

⑧　キジグルマ（雉子車）

道祖神の木像よりも狭い地域で分布が知られたものがキジグルマで、六合村・長野原町・吾妻町（岩島地区）にみられるだけである。調査では星河家の事例しかみられないが、小正月に他の「つくりもの」と一緒に作られ、他の時期には作られることがないものであること、他の「つくりもの」が豊作の予祝の呪物として作られることを考えると、キジグルマもまたかつては豊作の呪物として作られたものと考えられ、信仰民具の一つとみられる点が重要である。しかもなぜキジなのか、なぜここだけにあるのかという点も課題になる。

(三)　調査家庭の特色

①　六合村　山本直義家

木鉢作り、メンパ作りをする家。木の性質を知り尽した人の作るハナは独特で完成され、案山子神は畑作農民の信仰を示す。

②　六合村　中沢一孝家

堆肥場に立てた大きなハナはアワボ・ヒエボとは違い、道祖神の木像は六合村らしいもので、双体道祖神の信仰とつながる。

③　嬬恋村　滝沢正男家

胸元をえぐり込んで作る道祖神木像は、小正月に訪う神の姿を考えさせ、アワ俵・ヒエ俵に山村農業の厳しさを示している。

④　長野原町　星河義一家

アワボ・ヒエボを作り、アワ俵・ヒエ俵に農具をそえて釜神に供える。キジグルマは単なる子供の玩具でないことを示している。

⑤　吾妻町　野口保雄家

麻作りの心がこめられたような細い削りのハナを作り、農具をワラ束にまとめ、作男・作女の木像に豊作の祈りをこめている。

⑥　吾妻町　小池喜次郎家

釜神様に上げる農具のミニチュアに全て象徴されるように、新年の豊作を祈る農民の心情をよく伝えている。

⑦　中之条町　唐沢姫雄家

旧家の伝承を守っているもので、マユダマ飾りに秤とハカリダマのモチを下げたり、十六マイダマにクワ株を使っている。

⑧　中之条町　松井次郎家

素朴なハナや「つくりもの」を作り続けて来た家で、カユカキ棒やハラミバシなどの作り方の中に農民の心がある。

⑨　小野上村　石川広吉家

県内でも珍しいハナを作って売る家で、現在でも中之条町のボク市・渋川市の初市に店を出し、子持村あたりにも行商する。

⑩　子持村　後藤省三家

モチなし正月の家例を持つ家で、ニワトコで長い十六バナを作り、カユカキ棒は太いもの、アワボ・ヒエボも大きなものを作る。

三、おわりに

本書は、はじめにも記したとおり、吾妻川流域の十地区の十戸の事例を調査し、そのまま報告するもので、ここで報告した「つくりもの」は、原則として群馬県立歴史博物館に寄贈してもらい、博物館資料として収蔵されている。四年間の調査が、現物資料の収集をもかねているわけである。従って総括はその後のことになる。

（阪本英一）

《各論》

山本直義家のつくりもの

一、概　観

吾妻郡六合村入山では、人々は古くからメンパ・杓子・木鉢などの木工細工を生業として生計をたてて来た。（写真1）その木工に使用してきた用具をそのまま用いて小正月のハナ作りが行われている。道具は主にセンとナタであるが、メンパの板作りや杓子作りにおいて、木の特性を熟知した人々でなければ製作できない独特のハナとなっている。

山本直義氏は、明治四十四年、六合村入山の世立に生れ、小学校卒業と同時に父親（山本角太郎氏）のメンパ作りの手伝いを行っていた。昭和八年に養子に入ったが、その頃ハチヤ（鉢屋）に弟子入りして、木鉢作りを修得し、今日に至っている。現在、六合村のメンパとハチ作りを伝える唯一の伝承者である。

山本氏はハナ作りの他、道祖神や案山子神の木像を同様にして削り、顔や文字などを書いて仕上げている。「農業道具一式・職工道具一式・其他諸道具一式」と目録を半紙に書き、釜神様に飾るが、農具などのミニチュアを製作して供えるようなことはみられない。また、マユダマの材料としては、コメとソバ粉とが用いられており、マユミの枝に二種類のマユダマがささされ、そこにハナの削りの部分を掛けるという独特な美しさを示している。

写真1　入山世立地区近景

二、山　入　り

一月六日を「ムイカヤマ」といい、「ヤマハジメ」を意味する。

「山入り」は、正月の二つ重ねの御供えモチを焼いて食べてから出かける。十年前まで、一キロメートルほど先の村持ちの山（諏訪の下）へ行ったが、今は道祖神（世立西道祖神、天保三年〈一八三二〉）の近くの木を用いている。

木を切る時は、オサゴを持って行き、カツボクの回りにまいて、太陽に向かって（東の朝日に向かって）木を切った。ノコギリを使用するが、カツボクは、フシの間が長いものを一本切って来る。十二日、十七日は「木がはらむ日」なので木を切らない。（昔は、冬ごもりの時など、山小屋で十二山神の木片を作り、ナベのフタの上に御飯を上げた。最後には燃やしてしまった。）

運び方は、カツボクを三尺位の長さに切って、シ＝イコ（全長七十四・六センチメートル、上幅二十四・二センチメートル、下幅三十・六センチメートル）（写真2）などに結わえつけて背負って来る。ダンゴをさすボヤ（マイダマ木）も切って運んで来る。ヤマックワが良いが、今はマユミの木が多い。しなのある木が選ばれる。

切って来た木は特に祀ったりはせず、軒下へ立て掛けておいたりした。

三、木の種類

ハナや木像を作る木には、ヌルデ（カツボク）を使う。

マユダマをさす木としては、年神様・仏壇・仕事場・組のオイナリサンなどへ、マユミの木を用いて供えている。

その他の木としては、昭和二十年頃まで、カツボクを用いてハイカキ棒やフク棒なども十三日の夜に作っていた。一年間神棚に一緒に納めておいた。

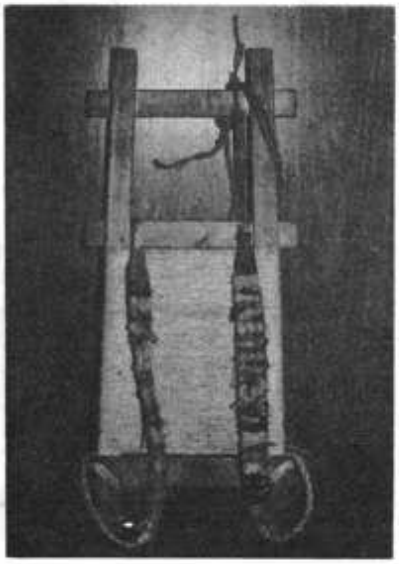


写真2　シ＝イコ

四、作る日・場所・道具

ものつくりの日に対する特別な言い方はない。ものつくりの日は必ず十三日に行っている。

作る場所は、家の作業場で作る。（メンバ作りの作業場がある）

道具には、スグセン（全長五十一・八センチメートル）・マガリセン（全長四十四・八センチメートル）（写真3）・ノコ（切る、全長六十七・〇センチメートル、柄三十五・四センチメートル、刃幅十一・六センチメートル）・ナタ（割る、全長三十四・二センチメートル、柄十一・八センチメートル、刃幅九・五センチメートル）を用いる。センは新潟三条よりとりよせたものである。

台にはトチの木のケズリダイを用いる。（径三十六・〇センチメートル、高さ十七・〇センチメートル）

道祖神（ドウソジン）は、顔の書かれた男女二体を一組として作られるが、道祖神の文字を縦に二つ並べて書いたものもある。案々子神（カカシジン）は、文字の書かれた単体のもののみである。

「つくりもの」を置いておく所は、そのまま作業場に置いておく。

五、ものつくり

(一) ハナの作り方

カツボクを四ツ割りにし、胸当て（二十九・八×十二・〇×十七・八センチメートル）をして台との間でおさえ、センで手前へ引くように上に向けて削ってハナを作る。（写真4）

削った先が丸くなるように仕上げるが、左右に削られたハナは、十～十五段ほどになっている。下部は内側から斜めに底部に向かって切り込む。表皮は全体に取り去られている。（写真5）

(二) カユカキ棒の作り方

四つ割りにした先端に薄いカツボクをはさむ。四カ所にセンを用いて削りを入れる。二本のカユカキ棒はワラ縄で縛られる。昭和二十年頃まで作られていた。なお、ハラミバシは作らない。

(三) アワ俵・ヒエ俵の作り方

センでカツボクの皮をむいたものをヒエ俵、皮をむかないものをフク俵といい、アワ俵の呼称はない。各々十本位をワラ縄で二か所結わえる。二束作るが、文字は書かない。昭和二十年頃まで作

写真4　センでのハナ作り

写真5　削られたハナ

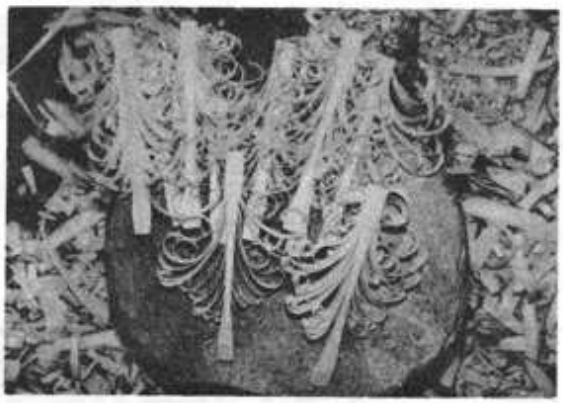
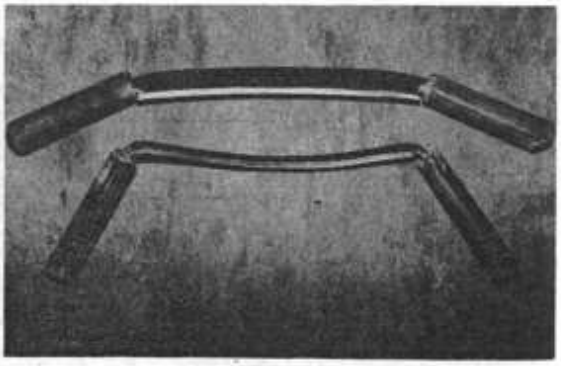


写真3　スグセン・マガリセン



られていた。

(四) 農具の作り方

「農業道具一式、職工道具一式、其他諸道具一式」と目録を半紙に書き、昭和二十年頃までは十四日の晩にカマドの上（カマガミサマ）に貼っていたが、今はダイドコロにしている。農具のミニチュアは作らない。（写真6）

(五) 道祖神の作り方

道祖神は、①木を切る、②切れ目を入れる、③エグリセンでえぐる、④側面をスグセンでこく、⑤二体を接合させる部分をこく、の順で製作され、顔と文字とが入れられる。必ず左が女、右を男とする。（写真7）

(六) 案山子神の作り方

センで丸木の皮をむいて、筆で正面に「案々子神」と書く。左右の側面も表皮をとり、平らに削っている。道祖神の作り方と共通している。

(七) マユダマの作り方

材料の粉には、以前は自家製のヒエ・トウモロコシ、今はコメ・ソバの粉を買ってきて用いている。七草過ぎに石臼でダンゴビキをし、十三日の前には仕上げておいた。（写真8）

マユミ・ヤマックワの木にショウギや木鉢に入れたマユダマを三個か五個さす。蚕が当たるように、十六ダンゴやマユの形のものを作ったこともあった。長さ一メートル位の木に二十～三十個のマユダマをつけていたものもあるが、以前は二メ

写真7　道祖神の顔の部分を墨で書く

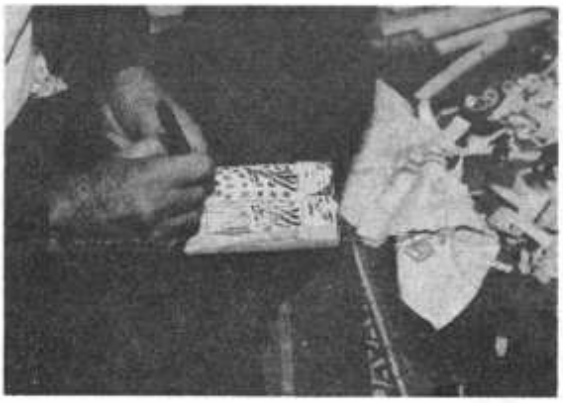


写真6　「奉納釜神様」と目録を半紙に書く
道祖神・案々子神の木像もみえる

写真8　コメ・ソバの粉のマユダマ飾りを作る

ートルほどの木もあった。また、カマドでマユダマをうでるのに、前の年のフク俵やハイカキ棒を燃やした。

六、お飾りかえ

飾りかえは、マユダマは十三日に、ハナ・道祖神・案々子神は、十四日の朝に飾りつける。

(一) ハナの供え方

神棚・年神棚・仏壇・エビス様・釜神様・作業場などの家の中をはじめ、大神宮(大天狗)・諏訪神社(小天狗)・道祖神などへは立て掛けて供えた。(写真9)

家の中では、マユダマ飾りの木の枝にハナの削りの部分を掛けたかたちで供えている。(写真10)昭和二十年頃まであった柄杓の置かれた井戸や堆肥舎にもハナやマユダマを供えていた。

(二) 道祖神の祀り方

道祖神は、神棚に祀られるが、十四日年にお供えとして、朝、白紙の上に御飯を上げる。

一月十五日の夜七時頃、東の「切り通し」の道祖神のそばでドンドン焼きが行われるが、その際に道祖神は焼かれてしまう。

(三) 案山子神の祀り方

案々子神は、道祖神と同様に神棚に祀ったあと、春に雪がとけてから最初に行った畑の隅に置いておく。

(四) フク俵・ヒエ俵

フク俵・ヒエ俵は、一年間神棚に納めておき、翌年マユダマをうでるのに、このフク俵やハイカキ棒などを燃やした。昭和二十年頃までのことである。一緒に

写真9 道祖神へハナを供える

写真10 マユダマ飾りに掛けられたハナ

農具をつけるようなことはなかった。

(五) 農具の供え方

十四日の晩までに、釜神様へ半紙に書いた目録を供える。これは昭和二十年頃までカマドの上に貼っていたが、今はダイドコロに貼っている。農具の「つくりもの」をするようなことはない。

(六) マユダマの飾り方・供え方

年神様や神棚へは、コメ・ソバの粉で作った二種類のマユダマを三個か五個木にさしたものを一本供える。しながあるヤマックワの木がよいが、ミズブサも用いられる。

七、小正月行事とのかかわり

十四日年は、百姓の年とりとも言われ、この日に飾りつけが行われている。

(一) ドンドン焼きと「つくりもの」

十五日の夜行われるドンドン焼きの際、道祖神は焼かれてしまうが、案々子神の方はそのまま神棚に祀られる。

(二) その他

蛇・ムカデ除けには、ウデミズを蛇が来ないようにと、マユダマをうでた汁を庭先へまいたことがある。二十年位前までのことである。

マユカキ（マユダマを取る）は、二十日正月にマユダマをザルに抜き取りふかして食べるが、ボヤは必ず燃やす。焦がして、サトウジ＝ウユで食べたりもする。

小正月の飾りもの・供えものの片づけは、二十日に下げるが、ハナは一年後、マユダマをうでる時などにくべる。

（神宮善彦）

中沢一孝家のつくりもの

一、概　観

荷付場地区においても木工細工に用いていたセンをそのまま使用して、ハナ作りが行われており、各家には各々木工の用具が残されている。荷付場の七軒は協同で山に入り、「つくりもの」を製作するための木を切り、それを作る家に置いておいた。カドマツ（カドマツは、十五日のドンドン焼きの日の朝はずす）にマユダマ飾りとハナとがつけられ、はなやかさをみせている。堆肥場に飾るタイヒノハナは、三方からセンによってハナが削られている独特なものである。

コメ俵・ヒエ俵には、「奉納　一、五穀豊穣　一、農機具一式」と書かれた半紙が折り込まれている。また、マユダマでは、クワの木を大黒柱（オカイコガミサマ）に縛りつけ、宝珠の玉を形どったものに特色が出されている。

二、山　入　り

大正月が明けて大安の良い日に木を切る。八日や十二日（十二サン）は、人によっては木が子を産むといって木を切らない。ただ、十一日に切ってしまえば、十二日でも大丈夫という。

荷付場の七軒が協同で山に入る。

朝八時頃から出掛けるが、その時にお供えのモチを一、二個食べる。コメを半紙に包んだもの（オサゴ）を木に紐で結わえ、安全を祈る。特に決められた山はないが、今年は湯の平の前の足倉（あくら）山方面へトラックで出掛けている。

木を切る時は、アキの方（恵方）をふさいではいけないとされ、その方向には木を倒さないようにする。ノコギリ・ナタを用いて、十～十五センチメートル位の太さのカッボク（ヌルデ）を荷付場の七軒分切って来る。

運び方は、以前はロープで木の元と先とを束ねて近くから担いできた。昭和四十二、三年頃までは耕運機などで乗せて来た。

運んで来た木は、特に家で祀るようなことはないが、荷付場七軒のうちの「つくりもの」を作る家に置かれた。六年ほど前までは、木を切って来た場所によって、上の山合いの木を用いた場合は中沢一孝氏宅、下の川に近いとっつきのうちの方の木を用いた場合は中沢武雄氏宅となっていた。今は回り番でサイクバショが決められており、庭へ持って行き、その日のうちに作っている。（写真11）

三、木の種類

ハナや木像、「つくりもの」に使う木として、カツボク（ヌルデ）が用いられる。

一方、マユダマをさす木としては、年神様・ザシキ・カマガミサマ・便所・土蔵・村の鎮守様（子安大明神）などには、ヤマックワの木が用いられる。ミズブサ（ミズキ）を使う人もみられる。その他の木はない。

四、作る日・場所・道具

ものつくりの日は「農の日」と呼んでいる。「ノオスベエ」などと言ってものつくりをするという。

十二日で仕事始めにする人もいる。（梨木）

作る場所は、各家で木を分けて持って行き、庭で作る。

道具には、セン（全長四十七・八センチメートル、刃二十三・六センチメートル）・ナタ（全長三十三・八センチメートル、刃十六・八センチメートル）・ノコ（全長四十八・六センチメートル、刃三十八・〇センチメートル）・ムネアテ（二十九・六×九・六×七・三センチメートル）などを使用する。

台に使うものは、センの支えとして、木の台を用いた。

作ったものは特に何かに入れるというのでもなく、エンガワや家の中に置いておくくらいである。

写真11　小正月の準備

五、ものつくり

(一)　ハナの作り方

カツボクの表皮は、ハナの下部のみ残されているが、他は取り去られている。

ハナは世立の山本直義氏製作のものと同様であるが、比較的大きい。割ったカツボクを胸当てをして台との間でおさえ、センで手前へ引くように上に向けて削ってハナを作る。

(二) カユカキ棒の作り方

ナタを用い、先端は十文字の四つ割り、頭部は四角に切り込んでいる。二本をワラ縄で縛る。削りはつけない。全長三十六・二センチメートル、径三・五センチメートル。なお、ハラミバシは作らない。

(三) アワ俵・ヒエ俵の作り方

カツボクの皮をむいたものをコメ俵・皮をむかないままのものをヒエ俵と呼んでおり、アワ俵はみられない。十二本ずつを各々ワラ縄で三か所縛り、その二つをつなげる。(写真12)中に「五穀豊穣　農機具一式」と書かれた半紙(写真13)を折ってはさみ込む。十四日午前中に飾りつける。長さ三十五センチメートル前後、直径三〜八センチメートルなど木の大きさは特に揃えられてはいない。

写真13　半紙に書かれた目録

(四) アーボ・ヒーボの作り方

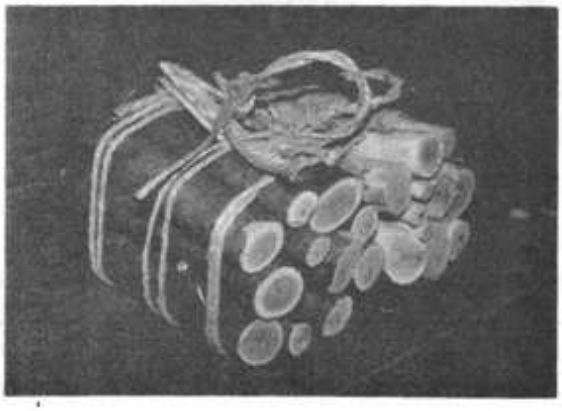
ここでは、アーボ・ヒーボと同様の用いられ方をする「堆肥のハナ」は、庭先で作られるが、胸当てをし、地面との間で一メートルほどに切ったカツボク(直径二・五センチメートル)をおさえる。立ったまま、やや前屈みの姿勢でセンを用いて手前の方へ削って先端部にハナを作る。三方からの削りをつけるのが特色といえる。元の部分は切り込んでいる。(写真14)

(五) カタナの作り方

カタナは持つ所を除いて、ナタでカツ

写真14　堆肥のハナをセンで削る

写真12　コメ俵・ヒエ俵



ボクの皮をむく。木の芯がやわらかいので、輪切りの様にして小刀で穴をあけ、ツバの部分を作る。全長六十五・〇センチメートル、径二・五センチメートル、ツバ径七・五センチメートル、厚さ一・五～二・〇センチメートル。

また、ツバのないカツボクの皮を全部むいたものは、オニウチボウと呼ばれ、オクノザシキ・床の間に一年間供えられる。

(六) 農具の内容と作り方

「奉納　一、五穀豊穣　一、農機具一式」と書かれた半紙を前述のコメ俵・ヒエ俵にはさみ込む。具体的な農具のミニチュアの製作はみられない。縦二十四・二センチメートル、横三十三・二センチメートルである。

(七) 道祖神の作り方

ドウロクジンと呼ばれる男女二体を一組として作られる。小刀で顔の部分のみカツボクの皮を取り去る。十五日のドンドン焼きの夜までに顔を入れるが、組の分まで作る。高さ十七・二センチメートル、直径六・五センチメートルである。

なお、案山子神は作らないが、同じ入山地区世立で作ることは注目される。

(八) マユダマの作り方

材料の粉にはコメの粉を六、七キログラム買って来て使っているが、昭和四十四年頃までは、ヒエ・トウモロコシ・ソバなどが用いられていた。

十三日の午後作り、十四日の朝早くゆでるが、カマドでゆでるとマユダマがうき上がって来るという。十六ダンゴを先にするが、クワの木を大黒柱（オカイコガミサマ）に縛りつけ、宝珠の玉に十六個作って飾ったりもする。(写真15)コネバチにあげて、粉をふってうつす。

六、お飾りかえ

飾りかえは、マユダマも含め十四日にあわせて飾りかえを行う。

(一) ハナの供え方

神棚・年神棚・ヤシキイナリなどへ二つ供えるほか、仏壇・エビス様・釜神

写真15　大黒柱に付けられた宝珠の玉のマユダマ飾りとハナ

様・便所神・土蔵・井戸神（昭和四十年頃までシキミズをしたハコイドがあった）・道祖神オシラ様・観音堂などへ、マユダマ飾りとともにハナが供えられた。（写真16）また、門口にはワラでできたヤセツボとハナ（写真17）が、堆肥舎（コエヤ）には、堆肥のハナとマユダマとが供えられる。（写真18）

（二）道祖神の祀り方

荷付場では、十五日の夜のドンドン焼きの時、燃やさないでエビス様のタナに置いて祀る。火事が好きで、家に何晩もとめてはいけないともいう。十四日の夜、顔を入れ、十五日の朝、茶碗に御飯とオミキを供える。

その後、夕食を供えてドンドン焼きに出掛ける時に、道祖神（荷付場道祖神、天保十四年〈一九八四年建立〉）の所へ飾って納める。

（三）アワ俵・ヒエ俵

コメ俵・ヒエ俵は、神棚の上にあたる二階の一段高くなった所へ供えた。その場所を歩いてはいけないとされた。一年間置いておき、翌年のマユダマをゆでる時にマキにしている。

（四）アーボ・ヒーボ

牛小屋の前の堆肥場に堆肥のハナとマユダマ飾りとを立てる。その際、堆肥を牛小屋から出してツミゴエをする。

アーボ・ヒーボの行事の話は特にない。

写真18　堆肥のハナとマユダマ飾りを立てる

写真17　カドマツに付けられたヤセツボ・ハナ・マユダマ飾り

写真16　道祖神にハナとマユダマ飾りを供える

(五) マユダマの飾り方・供え方

年神様や神棚へは五個ほど供えるが、お勝手・座敷（天井から）・仏壇の前には、特に大きな飾りが供えられる。（写真19）

七、小正月行事とのかかわり

(一) ドンドン焼きと「つくりもの」

十五日の晩、ドンドン焼きのけむりにまかれるとよくないとも言われ、村はずれの扇平でドンドン焼きを行う。カタナを作り、子供たちが火をたたいた後は、焼いてしまったり、おもちゃとしていた。マユダマを持って行き、それを焼いて食べるとカゼをひかないと言われた。

(二) 十五日粥（小豆粥）と「つくりもの」

十五日の朝、オカユを炊く。カユカキ棒でかき回すと先の四つ割りの所に御飯がつく。それを年神様に上げておく。（写真20）唱えことばは特にない。

オカユを供える時は、座敷で清めるが、後には脇によせておき、翌年マユダマをゆでる時に使う。ハラミバシはない。

(三) その他

成り木責めは、柿の木の所に、「柿がなれなれ」と言いながら木の回りにマユダマのウデユをまいた。

蛇・ムカデ除けには、マユダマのウデユを手や杓子でかき出す。家のひと回りを、「クンチ、クンチ」と言いながらまいたりした。

マユカキ（マユダマを取る）は、二十日正月の朝、マユダマを下げて来る。

小正月の供えものや飾りものの片づけは、二十日正月の朝片づけをするが、細かく切ってボヤにしたりする。燃料の一部として処分される。

（神宮善彦）

写真19　仏壇前のハナとマユダマ飾り

写真20　ハナとカユカキ棒

滝沢正男家のつくりもの

一、概　観

滝沢家は、吾妻郡の西部、嬬恋村でも国道から万座川に沿って北へ入った山間に位置し、山村と畑作中心の門貝入口に位置する。滝沢正男氏は農業中心で、冬季炭焼きもしていたが、二十年ほど前、嬬恋村農協に勤務してから兼業農家となり、それ以来「小正月のつくりもの」をせず、せいぜいマユダマ程度のことで済ませていたが、今回の調査にかつてやっていたものを再び作って協力してくれることになった。ここでは、ハナやホダレはなく、道祖神、アワ俵・ヒエ俵、農具、カンジン棒などの「つくりもの」とマユダマでなり、材料の木もヌルデンボウ（ヌルデ）とマユダマ木のヤナギ（ハナ木と呼ぶミズキも使う）程度で、特色があると言えよう。

写真21

二、山　入　り

昔はいろいろあったろうが、特別のことはなく、都合のよい日に何も持たず、方角も供えものもかまわずに入って、必要な木を切って来る。（写真21）炭焼きをしていた頃は、炭の原木を切りながら良い木を見つけて、背負って来たものだった。しかし、元日に十二様にモチを十二キレ上げて一年の無事を拝むことはしている。

切る木はヌルデ（ツクリモノ用）・ヤナギ（マユダマ木）で、ヌルデは切り倒して枝を落とし、長いままで担いで帰り、家の裏に立てかけておき、使う時に適当な長さに切って家の中へ入れる。塩とか供えものはしない。ハナは作らないからハナ木というのは切って来ない。マユダマ木も近所の家ではミズブサ（ミズキ）を使うが、滝沢家ではヤナギ（ドロヤナギではない）を使う。

三、ものつくり

「小正月のつくりもの」は、十三日の晩に作って十四日に間に合わせることになっているが、特に呼び名は知らない。普通、イロリ

のまわりで作業する。農具などを作る時、焼火箸を使う都合もある。道具は、ノコギリとナタ（ホイ付きの土佐ナタ）で、太い株の方を台にして作業する。作ったものは箕の中に入れておき、作り上がると各々の場に上げる。（写真22）

(一) カユカキ棒の作り方

一組二本作る。皮をむき、下を枕状に削り、上部は四ッ割りにする。（写真23）特にケズリは入れない。神棚に上げておく。

(二) ハラミバシの作り方

二膳（四本）作る。箸八寸の長さになるように（少し長め）ヌルデを切り、それを二つ割りにして削り込む。丸くて太いもので、神箸ということがよくわかる。荒削りで細くしない。道祖神のお膳につける分だけである。（写真24）

(三) アワ俵・ヒエ俵の作り方

尺二寸（三六センチメートル）ほどの長さにヌルデを切ったもの十二本（閏年は十三本）を用意し、うち六本（閏年は七本）はていねいに皮をむいてコメ俵分とし、他の六本はコメ以外の穀物ということで、各々三か所をワラ縄でしばり、縄の両端を長くのばしてない合

写真22

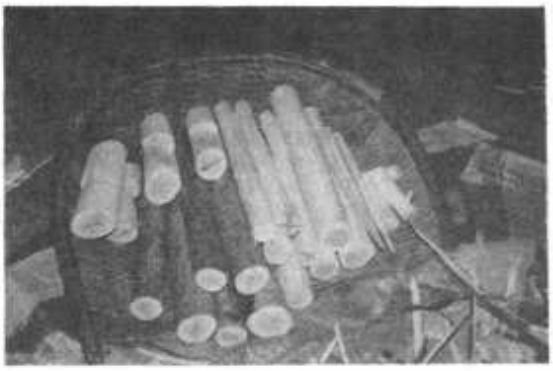
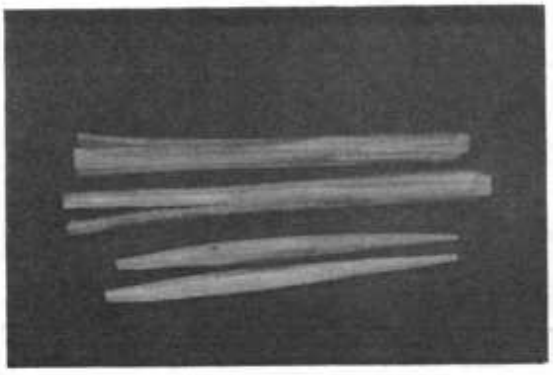


写真23

写真24　上はカユカキ棒　下がハラミバシ



わせ、二つの俵を合わせて吊るせるようにして結びつける。（写真25）コメ以外の雑穀の方はヒエとも言うが流動的なようである。

（四）農具の作り方

エンガ・テンガは、ヌルデを半分に割り、さらに各々の長さに割って皮をとってから、長いヌルデで柄の太いものを作り、焼火箸で穴をあけたところへ突きさして仕上げるが、エンガ・テンガともに柄のつけ方が違うだけで、同じ大きさでもかまわない。（写真26）

（五）杵の作り方

ヌルデを適当な長さに輪切りにし、皮をむいたものに焼火箸で穴をあけ、別に作った柄をさして作る。四本が一組である。しかし、臼は作らない。

写真26

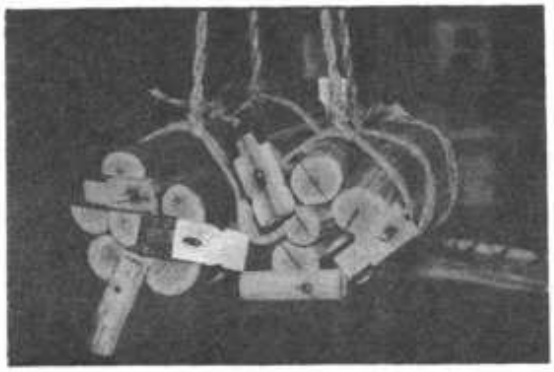


写真27

写真28

写真25

(六) 道祖神の作り方

男女一組作る。長さを決めて輪切りにしたヌルデに、ノコギリで切り込みをつけ（必ず根元が下になるようにする）、ナタで胸の部分を削り込み、その後皮をむく。（写真27）切り込みは、他地域のものが直角になるのと違って鋭角に切り込む。削りきると顔を描くが（写真28）、男は強く、女はやさしく描き、裏に年月日・氏名を書く。胸には男・女と書く。（写真29）

(七) カンジン棒の作り方

ヌルデの長いもの二尺五寸から三尺程度（七十五～九十センチメートル）のものを皮をむき、元の方にミゾを掘り、むいた皮を螺線状に巻きつけ、松のヒデに火をつけて全体をいぶしたあと皮をはぐとまだら模様ができる。これのミゾの部分に村中から集めたお松のオシメの紙を巻きつけ、カンジン棒とする。（写真30）

(八) マユダマの作り方

サク（作）ノハナと言って、できるだけ早く作る。（写真31）遅れると実際の農業が遅れるという。コメの粉、ソバ・アワ・ヒエの粉など、各種たくさん作った。昔は十三日の夜作ったが、近年は少ししか作らないので十四日に作ってお飾りするのが普通になった。普通のマユダマは丸く作るが、オシラ様のマユダマはマユ形に三十二個作り、カゴ（ザル）の中にワラでコス（マブシ）を折って入れて、その中にマユダマを入れ、ちょうどマブシにマユができているようにして作ったが、現

写真30

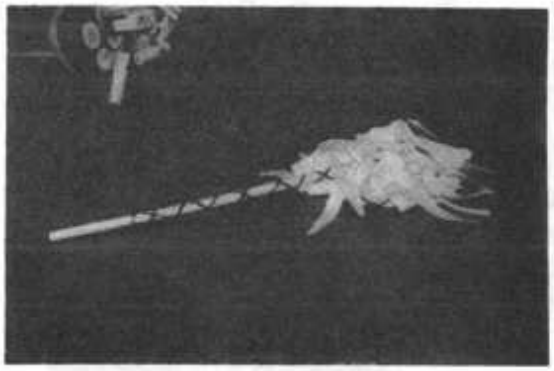


写真31

写真29

在はそんなことをしなくなった。色は白だけでなく、赤・青に染めたりする。

四、お飾りかえ

全て十四日のお年とりに間に合うようにする。マユダマは、年神棚・仏様・エビス・釜神・床の間・便所・玄関・十二様・墓地・観音堂（水道のなかった頃は共同の井戸）などへ供える。小枝に三個（赤一個、白二個）さしたものを原則とする。

アワ俵・ヒエ俵は、台所の隅の梁に吊す。エンガ・テンガをさして飾るが、釜神様に上げるとは言っていない。

道祖神は十三日に作ると床の間に飾り、十四日の夜、勝立てをしてハラミバシをつけたものを供え、十五日の晩のオンボヤ（ドンドン焼き）に持って行くことになっている。

五、小正月行事とのかかわり

(一) オンボヤ

子供たちはカンジン棒を持って村中をまわり、家々からカンジン（寄附）をもらって来る。昔はマユダマとか米・金をもらったが、今は金になっている。お松は積み上げて燃すもので、小屋は作らない。世話人のような人たちが出て、子供が集めたお松を（十五日の早朝お松外しをする）、モミの木を柱にして積み上げる。すぐ近くに鍋をかけ、オンボヤの飯を煮る。この時、村人が持参した道祖神を鍋の外側に掛けて火を燃す。そして焦げて下に落ちると次の道祖神を掛け、次々に燃す。飯は集まった人たちにオニギリにして与える。昔はヤサツボ（ヤセツボともいうワラワン）を持ってもらいに来て家族で食べた。

(二) 十五日粥

小豆粥でなくシラ粥で、炊き上がるとカユカキ棒で、一本を東西南北と四隅をさし、一本を中央にさして家内安全としてさして使う。十五日粥は固い方がよいという。

(三) モグラ除け

カユカキ棒はとっておき、家のモグラ除けに使う。一本を四つに割って合計八本にして家のまわりにさす。

(四) その他

成り木責め、マユネリなどはない。

(五)　マユカキ

マユダマはサクノハナというが、取ることはコナシコト・コナシモンと言い、二十日正月に片づけて終わる。エビス様の日に片づけるもので、箕の中に取って入れる。

六、「つくりもの」の処分

道祖神は、オンボヤに持参し、オンボヤの飯を煮る鍋の縁にかけ、下からの火で焦げ落ちて燃えるようにした。

ハラミバシも一緒に持参して、飯を煮る燃し木とした。

タワラは、初午の日に下げて、マユダマをゆでる時の燃料とした。また、十二本（閏年は十三本）に割ってイロリのまわりに立て、一月から十二月に見立てて、木の状態で天気を占った。塩をふくと風が強い、水を吹くと雨が多い、変化がなく普通に燃えると普通というような判断だった。また、イロリの中に根元からくべて、半分くらい燃えていぶると（けむると）悪いとか言い、しまいが水が出ると今年は水が多いとも言った。

カンジン棒は、子供たちが村中をまわってカンジンをする時に使うが、オンボヤの時、火の中へ入れて燃してしまう。

農具は、子供たちの玩具になったりするが、多くはイロリで燃されて片づけられる。

アワボ・ヒエボは作ったことがないということである。

七、おわりに

二十年ぶりに作ってもらったことに示されるように「つくりもの」を本格的に作って小正月行事を行うことは忘れかけられていた。久しぶりに作って昔をなつかしんだ程である。しかも、隣の長野原町で作られるアワボ・ヒエボ、ハナ（ホダレ）、十六バナ、キジグルマなどは作ったことも見たこともないということも興味をひかれることである。

「小正月のつくりもの」は、公民館行事などで講習会でも開いて伝承活動をしないかぎり、急速に忘れられていくものとみられる。

（阪本英一）

星河義一家のつくりもの

一、概　観

星河家は、国道一四五号線が吾妻渓谷をぬけた所の川原湯温泉の西、国道より一段上の集落に位置する農家で、氏神王城神社との関係もあって、年中行事に関する家例をよく守り、「小正月のつくりもの」は絶えることなく続けて来た。中でもホダレと呼ぶハナは、上下二段で人形（ヒトガタ）に近いものであり、十六バナは、一本の木から同じような長さの枝の出たコメゴメの木を切って来て作るものである。特にキジグルマと呼ぶ車をつけた「つくりもの」は、この近辺だけで作られるというもので、作ると直ちに小さい子供に与えてしまうが、原則として小正月だけに作られる玩具として（季節玩具・信仰玩具とも言えるもの）注目されるものである。

写真32

二、山　入　り

初山入りは、正月二日と決まっていた。昔はモチ・お頭つき・オサゴを持って行き、拝んでから切ったが、近年は略されている。木はヌルデ・コマゴメ（コメゴメともいい、ミツバウツギのこと）・ボク（ヤマクワ）、それに篠の棒を数本取って来る。ヌルデはヌリデンボウと言われる。年神様のマユダマの木にはミズブサ（ミズキ）を使うので、それもとって来る。

切った木は、担いで家に持ち帰り、屋敷神の所へ置いて、失礼にならないようにする。特別の供えものはしない。

三、ものつくり

正月十一日を「ノウビ」（納の日または農の日）と言うが、作るのは十三日あたりで、十四日のお飾りかえに間に合うように作る。場所はダイドコと呼ぶ土間または縁先で、陽のあたる場所で作ることも多かった。

道具は、ナタ・小刀・ハナカキナタで、台としてヌルデの根元の方のくずの部分を割ったものを使う。

作ったものは、何でもよいから失礼にならないようにしておけばよいという。

(一) ハナの作り方

皮をむいたコメゴメの長いものを根元を先にして、(写真32) 向うへハナカキナタをあてて、手前に引くようハナをかき (削り)、左右にハナをつけると木の向きを変え、再び左右にハナをかいた後、ハナカキナタで切り込みを入れ、手で折る。従って、ハナは人形のようになる。これを繰り返して何本も作る。(県内のどこでも見られない形である)

(二) 十六バナの作り方

一本の木から二本に分れているコメゴメの枝を選んで取って来て皮をむき、根元の方から左右同じように八段ずつのハナをかき、二本合わせて十六段にする。(写真33) これは上方からはかかないので、ハナは全て下に向いて下がる形になる。

(三) カユカキ棒の作り方

ヌルデの木を適当な長さに切り、皮をむき、下方を割って杭状にし、上を四ッ割りにする。この時は上から割るのでなく、ナタを下においてヌルデをあて、上から棒で叩いて割れ目を入れたあと、ナタを上にしてトントン割るのは、ハナをかいたものをつぶさないで作業する工夫である。

(四) ハラミバシの作り方

箸八寸の長さに切ったヌルデを割り、中太になるように箸を作る。

(五) アワ俵・ヒエ俵の作り方

比較的太いヌルデを適当な長さに切ったものを十本用意し、半分の五本は皮をむく。皮をむいたものはアワとかコメとかいい、むかないものはヒエという。別々にワラ縄でしばったものをアワ俵・ヒエ俵という。(写真34)

(六) アーボ・ヒーボの作り方

写真34

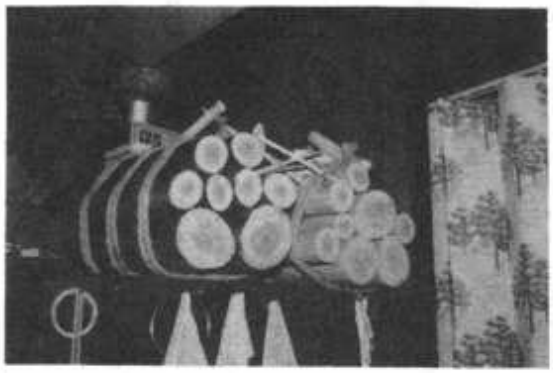


写真33

ヌルデの枝を適当な長さに切り、皮をむいたのを八本、むかないものを八本用意し、大きなケズリ（ハナにあたるもの）をつける。（写真35）竹は前の竹やぶから切り出して来て、先端を二つ割りにし、四ッ割り、さらに八つ割り、十六に割ってから先を尖らせ、火であぶってから折り曲げて、その先端に用意のヌルデをさして仕上げる。

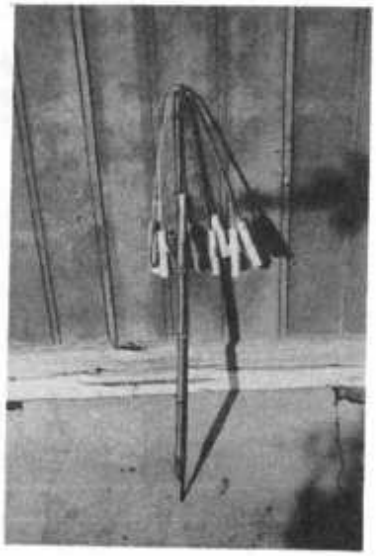


写真35

写真36

（七）農具の作り方

エンガ・テンガを各々二個、マネを一個作る。

ヌルデの木を割って板を作り、柄をつけてから、刃にあたる部分に墨で模様をかいてエンガ・テンガとする。マネはマネヒキともいい、畑に種まきをする時、線引きをする道具で、柄に直交する形でヌルデの板をつけ、板の下を切り込みをつけたり、墨で模様をつけたりする。これはアワ俵・ヒエ俵にさし込んで一組にするものである。

（八）道祖神の作り方

ヌルデを輪切りにし、皮をむいたものを二本作るが、削り込みはしない。男女一対のわけで、墨で男・女の顔を描き込み、道祖神と書くと、両わきに年月日・星河氏と書き入れる。

作男・作女・案山子神は作らない。

（九）麻尺の作り方

長い篠の棒を葉をつけたままで切って来て、七尺（二百十センチメートル）のものを麻畑の数だけ作る。トッカ（一ッカは約一畝）の人は十本の麻尺を作るといい、数を多く作るわけである。

（十）キジグルマの作り方

「山入り」でボクを切って来る時、キジグルマを作る分として、ヌルデの木の曲がったものを見つけてとって来るが、これは「つくりもの」の最

後に細工する。曲がりの部分を胸としてナタで荒削りして、頭を作り、腹を削って尾の方まで長くする。（写真36）腹から尾の部分は平らに一直線に近い削り方で、カンナを使わずに仕上げる。背中から羽根の部分は、皮をむいただけとする。腹に掘り込みを入れ（ノコギリ使用）、これに車軸にするヌルデの板を入れ、両端に輪切りにしたヌルデの車輪をつけて仕上げる。（写真37・38）

（十一）マユダマの作り方

十四日にコメの粉をこねて作り、ゆであげてから冷してボクにさす。（写真39）年神様のものは、ミズブサ、蚕神様のものはボク（ヤマクワ）にさす。これは十六ダマといい、マユ形のものとソロバンダマのもので十六個作ってさす。宝珠の玉のような場合もあるという。その他のマユダマは枝ぶりをみていくつでもさす。

写真37

四、お飾りかえ（写真40）

十四日にする決まりで、マユダマを作って神仏に供え、「つくりもの」は各々の場所に上げる。ハナは神仏に各々上げるが、カユカキ棒には、一本には田方、もう一本には畑方と文字を書いて神棚に上げる。（写真41）道祖神には顔を描き、道祖神・年月日・星河氏と書いて座敷の机の上に飾る。ダルマやキジダルマには目を入れ（写真42）、羽根の模様を描いたりする。これは道祖神の前の方に置く（供える形になる）。子供の小さかった時は、作った所で与えたという。

アワ俵・ヒエ俵にはテンガ・エンガ・マネをさして、釜神様の所（お勝手の釜柱）に吊るして奉納する。この時、星河家では、「目録」として、釜神様に農具一式を奉納する旨を書いた半紙も一緒に上げることになっている。麻尺はコイヤ（肥屋）に立てる。

写真38

写真39

写真42

写真40

写真41

五、小正月行事とのかかわり

十四日の夜はお年取りで、夕飯にはソバを供える。道祖神の木像にもソバを供えた後、ドンドン焼きに持参して、火の中にくべて焼く。

十四日には、昼前に七回掃除しろと言われているが、これは農作業の草とりのことだという。

十五日の小豆粥は、カユカキ棒でかきまぜてからハラミバシで食べる。食べたあとはとっておいて田の水口に立てると言われた。

六、「つくりもの」の処分

マユダマは十八日に取る。フスマ袋に入れて二階の手すりに下げて乾燥し、春蚕から夏までホウロクで焼いて食べた。ヒエやトウモ

ロコシのものはやわらかかったが、コメの粉のものが一番かたかったので早く食べる。

ハナは燃やしたりした。タワラ木は、昔はマキジャク（薪尺）に切ったものを庭にも積み上げたもので、イロリで元から燃した。

キジグルマは子供の玩具で、家の中だけでなく雪の中へも引き出したので、こわれるとなくなってしまった。後で作ることはない。

麻尺は、麻畑へ立てた。昔は岩島村（現吾妻町）と並んで盛んに麻を栽培したので、その麻の生長を願うとともに、麻の生長の目印ともなるものが麻尺だった。

七、おわりに

「概観」でもふれたように、星河家では「つくりもの」の一つとしてキジグルマを毎年作って来た。これは、これまで知られているところでは、ほぼ長野原町一円と、隣接する六合村及び吾妻町岩島地区の一部という限定された小地域だけに存在するもので「小正月のつくりもの」として作られてきたものとみられる。キジグルマの事例は、遠く九州地方（福岡・大分・熊本の三県のみ）にみられるが、これは小正月とは関係のないもので、寺の縁起物、子育ての玩具として市販されているものである。一方、長野原町など吾妻地方のものは、「小正月のつくりもの」の一種として作られていることが特徴で、信仰玩具としての面がみられること、季節玩具であることなどが注目されるところで、星河家を含む林地区全体が調査される必要がある。

（阪本英一）

野口保雄家のつくりもの

一、概　観

野口家の「山入り」は、昔はしたくまで決まっていたと言い、儀礼的なものが固く守られていた。「山入り」は正月二日で、「つくりもの」は四日と決まっていた。「つくりもの」のアワ俵・ヒエ俵は、ここではコメ俵ヒエ俵と呼んでいた。家の外の神にハナを飾るお松杭は現在はナラの木であるが、かつてはホウの木を用いたという。

麻作りをしていた時は、麻畑に麻尺とハラミバシを一緒に立てたこともあったという。カユカキ棒も麻畑に持って行き、割って一ツカ（ここでは三十坪）に一本ずつ畑の隅に立てておいたという。アーボ・ヒーボをコヤシバに立てておくが、四月頃、家の近くの畑の蒔付けが始まると、その畑に持って行き立てることとなっていた。農具は年により、作る種類も異なる場合があったが別に理由はない。正月十五日の小豆粥の上にカユカキ棒で「畑」の字を書き、その後、逆にして粥の上に立て、そこについたコメ粒の数で占いをしていたともいう。

写真44

写真43

二、山　入　り

「山入り」の日は正月二日と決まっている。

「山入り」をする山は別に決まっていないが、普段、山の様子をみておき、ある程度予定をたてておく。持って行く道具は、ノコ・ナタ・背負梯子（ショイコ）である。

良い材料を最初に見つけた所で、その木に供えものをする。その時の方向は別に考えない。供えものはオサゴで、その木の回りに振りまいてから切り始める。

祀り方としては別にない。御幣は別に作らなかった。

木の切り方は別にない。方向も考えない。切る木はオッカド・コメゴメ・ナラ・ヤマクワである。

運び方は、材料の木は束ねて、担いだり、背負ったりする。運んで来た木は、家の外に置き、年々によって置く場所は一定していない。置き方は立てかけて置くか、横にして置く。地面でない所が多い。

三、木の種類

(一) 「つくりもの」に使用する木

ハナにはコメゴメの木を用いる。一年でのびた、まっすぐな木を選ぶ。大体、百五十～百二十センチメートル位のものを切って来る。(写真43)

「つくりもの」には、オッカドを用いる。細工に手頃な木を選ぶ。真直ぐの所が多い木を選ぶ。

木像にも、オッカドを用いる。(写真44)

杭にする木には、ナラを用い、畑・倉・庭に立てる。この杭にハナを結わえる。

(二) マユダマをさす木

年神のマユダマの木にはヤマクワの木を用いる。枝の具合を考慮して切って来る。

オシラ様のマユダマの木には、山から竹を切って来て使う。飾る日に準備する。

座敷に飾るマユダマの木は、普通、メエダマの木と呼んでいるヤマクワの木を使う。

家の外に供えるマユダマの木にはヤマクワの木を使い、メエダマの木と呼ぶ。

以上の他に、ホウの木を墓地・屋敷稲荷にハナを飾る杭とする。

四、作る日・場所・道具

ものつくりの日を特別な呼称で呼ぶことはない。ものつくりの日は、大正月が過ぎてから始めるが、別に決まってはいない。作る場所も別に決まってはいないが、普通、庭か軒下が多い。

道具は、自作のハナカキナタが主であって、市販のものも使う。屋根板割に使用したナタ・手曲りノコも使用する。

台には、手頃な木の切れ端を使うが、別に決まってはいない。

木像は、木のうらともとを間違わないように目印をつけてから始める。

作ったものは、ゴザの上に並べて置く。そしてそれを茶の間に置く。神棚の近くだからである。

五、ものつくり

(一) ハナの作り方（写真45）

名称は、ホダレといい、一段・二段・八段（十六段）がある。

材料には、コメゴメの木を用い、正月四日頃に、この木の皮をむいて干しておく。それをハナカキナタで材料に応じて何段かに削る。削り方は手前に引く方法で行う。一段が大体十センチメートルから十二センチメートル位の長さとなる。これを一段・二段にノコで切って行く。（写真46・47）本数は飾る箇所に応じる。十六段とは八段のものを二本合わせたものを言う。

(二) カユカキ棒の作り方

名称は普通、カユカキボウと呼び（写真48）、材料にはオッカドの木を用いる。

長さ約二十五センチメートル、直径五センチメートル位のものを使用する。下部を杭状に尖らせ、上部は四つ割りにする。皮は全部削り、上部側面に一個所ケズリバナをかく。二本一組とする。

(三) ハラミバシの作り方

材料にはオッカドを使用し、オッカドを二つ割りにしたものを更に二つ割りにと続け、適当の厚さにする。長さは約二十三センチメートル位とする。中央部を極端に太くし、両端は削り、大体普通の箸より太い位にする。

写真45

写真46　一段・二段のハナ

この形は穂バラミの状態を表わすものと伝える。（写真49）

作る数は、家族の人数分の箸の数に一本（ハシ）を加えて仕上げる。これをワラで束ねて神棚に供えて置く。

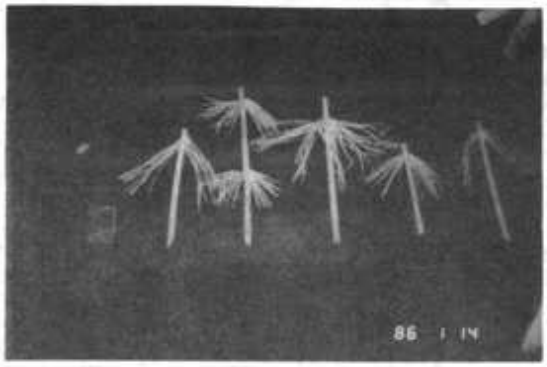


写真47　吾妻町松谷地区のハナのいろいろ

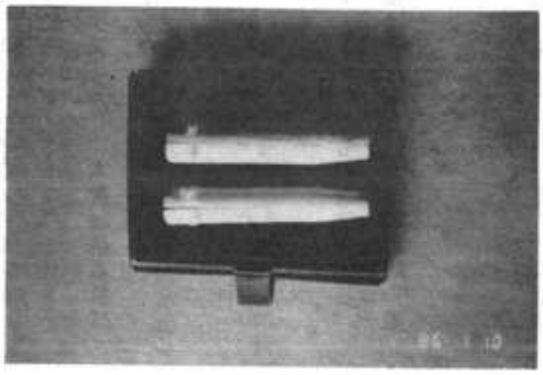
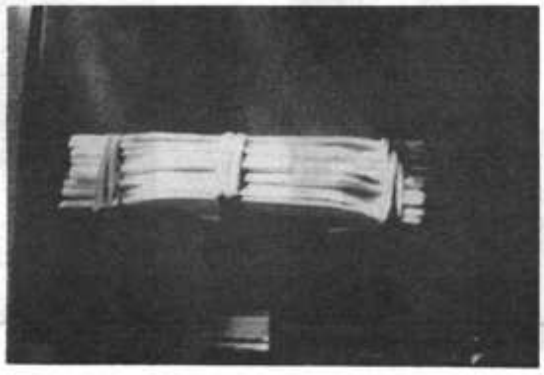


写真48

写真49



（四）　アワ俵・ヒエ俵の作り方

普通、コメ俵・ヒエ俵と呼び、オッカドの木を使用する。

オッカドの木を長さ約四十センチメートル位に玉切り、八本は皮を全部削り、八本は皮をつけたままとする。削った方はコメ俵を表わし、他はヒエ俵を表わす。これらを別々に三個所束ねて俵とする。この束ねる縄は新ワラを使う。（写真50）

（五）　アーボ・ヒーボの作り方

材料は竹またはオッカドの木を用いる。

全長二百二十四センチメートルからの青竹の先を十六に割り、そのうち十四本は火にあぶりながらかさ状に曲げる。他の二本はそのままに立てて置く。

オッカドは十～十二センチメートル程度に玉切ったもののうち七本は皮を全部削って除き、他はそのままにし、二段のハナをつける。これを竹を曲げた十四本の先に、一本に一つずつさし込んで仕上げとする。これをアーボ・ヒーボと呼んでいる。竹の中央に真直ぐに立っている先端にホダレをさす。（写真51）

（六）農具の内容と作り方

農具は、オッカドの木を適当に切ったり、割ったりして、農具の大きさに応じた形に仕上げる。刃の部分は墨をぬり、ものによっては針金や糸も使用する。（写真52）以下に作る農具名を記す。エンガ・テンガ・カマ・ノコギリ・天ビン・肥桶と柄杓・杵と臼・クマデなどである。

（七）作男・作女の作り方

オッカドの木を用いる。

直径三、四センチメートル位の材料を長さ十センチメートルまたは八センチメートルに輪切りにして、うらともとを間違わないように印をつけておき、この中央部分の皮を削りそこに顔を墨で書く。大きい方を作男、小さい方を作女とする。（写真53）

写真51

写真52

写真53

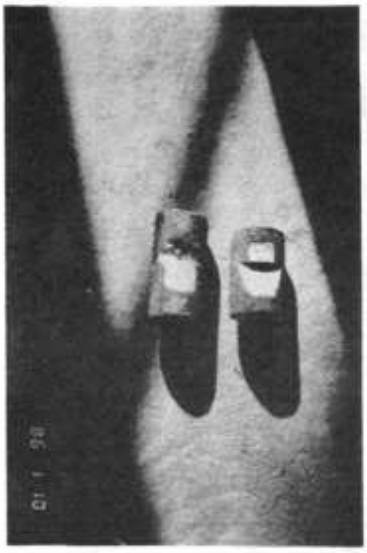


写真50

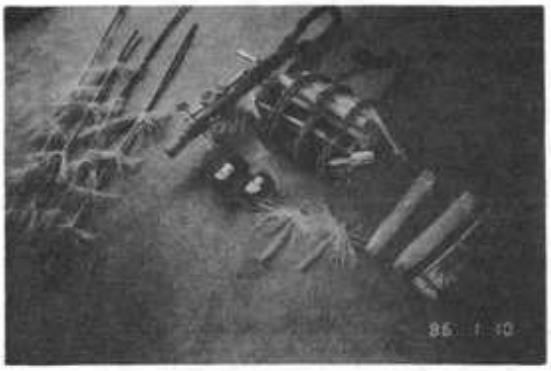


写真54　「つくりもの」とマユダマ飾り

写真55

（八）麻尺の作り方

材料には、シノまたはオガラを用いる。

終戦時までは作ったが、現在は作らないという。シノまたはオガラで、長さ六尺五寸のものを作ったという。

（九）マユダマの作り方

材料は、コメの粉を主に使い、昔はヒエ・アワ・トウモロコシなどの粉を使った。ヒエは蒸したヒエを挽いて粉にしたものだった。

粉をいつ挽くかは、別に決まってはいないが、昔は五・六人の共同水車があって、そこで挽いたが日は別に決まってはいなかった。

作るのは正月十三日で、オシラ様にはマユ形のものを供え、他の神仏には、十文字のヤマクワの木にさすが、中央の先端には大き目の丸いマユダマを、その左右は小さ目のものをさして供える。

ゆで方・ふかし方は、粉を木鉢の中に入れて、それに熱湯を注ぎ、こね合わせる。作ったものは一回でふかした。セイロオでふかし、ふかしたものは木鉢に入れた。

マユダマは、主としてオシラ様から先にさした。マユダマをさした時、枝の先端が突きぬけないようにした。

六、お飾りかえ

正月十三日の一日で飾りかえを行う。（写真54）

（一）ハナの供え方

神棚に二段のハナと両端にヤマクワにさしたマユダマを飾る。

年神棚には、ヤマクワの枝にマユダマ（三個）をさし、その枝にハナ（二

段）を掛ける。

また、仏壇（写真55）とエビス様には、二段のハナとマユダマ（三個）を供える。

釜神様には、二段のハナとマユダマ・ワラヅトにさした農具一式・コメ俵・ヒエ俵にもさす。（写真56）

馬屋の神（写真57）・床の間にも、二段のハナとマユダマを供えるが、床の間には多数のマユダマを飾る。また、便所神には二段のハナ（写真58）を飾る。

写真57

写真58

門口には、二段のハナ、母屋の庭の中央に二本の杭に松の小枝とハナを結びつける。

一方、玄関（写真59）・屋敷神・井戸神・墓地・道祖神・十二様には一段のハナを供え、土蔵には、一段のハナ及び入口左右に杭を立て、松とハナを一緒に結びつけて供える。また、堆舎には、一段のハナ及びアーボ・ヒーボを堆肥の中央に立てる。

地神様（畑の隅）には一段のハナを畑の隅に立て、オシラ様には、

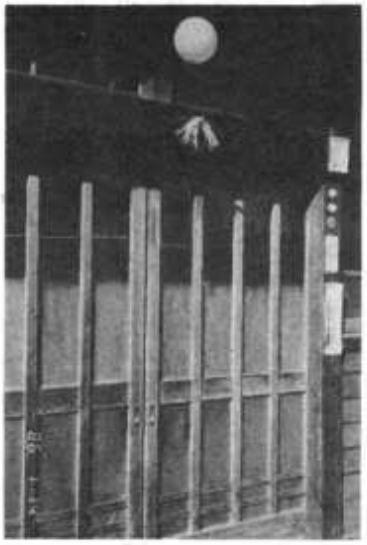
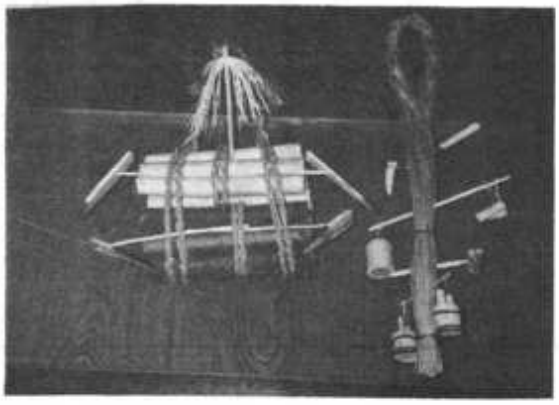


写真59

写真56



二段のハナとマユダマ（十六個）を竹の枝にさして飾る。

写真60

写真61

（茶の間の中の東）（写真60）また、茶の間の四方に一本ずつ、一段のハナを飾る。

（二）作男・作女の供え方

茶の間の神棚に一年中置く。そして、ハチ（鉢）に御飯を入れて供える。小正月が終わったあとは、前年のものを屋敷稲荷に納める。

（三）アワ俵・ヒエ俵の供え方

呼び方は、普通、コメ俵・ヒエ俵と言い、これにエンガ・テンガをさして、釜神様に供える。何故一緒に農具をつけるか、その理由は不明で、昔からこうしている。

（四）アーボ・ヒーボの供え方

一般に、肥庭に立てて、豊作を祈願する。（写真61）何様に供えるかは、特に決まってはいない。新しく堆肥を積みあげることはない。

（五）農具の供え方

釜神様に供えるが、理由は不明である。ワラ束を作り、これにさす形でまとめて供える。臼が入る理由はわからない。

（六）マユダマの飾り方・供え方

年神には、ヤマクワの株の枝にマユダマをさして飾り、神棚には、十文字のヤマクワの枝にさして飾る。この時、中央の先端には大きなマユダマをさし、その左右の枝には小さなマユダマをさして飾る。

オシラ様へは、竹の枝に十六個のマユダマをさして飾る。形はヒョウタン形をしたマユの形のものをさす。竹は新しく切って来たもの（新竹＝昨年のもの）を使う。

七、小正月行事とのかかわり

(一) 十五日粥と「つくりもの」

十五日粥の上にカユカキ棒で「畑」の字を書く。この時、唱えごとはない。これを扱う者は年男である。（写真62）このあとは神棚に上げておく。昔、麻を作っている時は、これを麻畑の仕事が始まった時、畑に持って行き、割って畑の隅に麻尺と一緒に立てた。また、十五日粥をハラミバシで食べた。（写真63）十五日粥を食べたあとは、再び家中のものを束ねて神棚に上げておいた。昔、麻を作っていた時は、その畑に麻尺と一緒に立てた。

写真62

写真63　ハラミバシで小豆粥を食べる

(二) 行事と供えるもの（ドンドン焼きとの関係）

正月十四日午後三時頃より夕方にかけてドンドン焼きで、各家の門松を集めて燃やす。各家でハナやマユダマを供える。また、厄年の人たちが、厄落しの行事としてミカン・銭などを配ったり、投げたりする。

(三) 十六日の行事と「つくりもの」

家中の者が、朝、水と線香を持ってお墓参りに行くことになっている。

(四) 蛇・ムカデ除け

別にない。しかし、正月のマユダマを持って青ものをとりに行く。蛇にかまれないまじないだという。

(五) その他

マユカキは、二十日正月の朝で、マユダマを取って、曲物のメンパまたはシ■ウギに入れる。また、地神様は、屋敷内に祀ってあり一段のハナを供えるのみで、他の物は供えない。

(六) 小正月の飾りもの・供えものの片づけ

二十日正月の朝に片づける。この時、コメの粉を炊って家の回りにまく。これは蛇除けだという。この残りは砂糖を入れて家中で食べてしまう。

（阿部　孝）

小池喜次郎家のつくりもの

一、概　観

小池家の「小正月のつくりもの」について、かつては固く伝統を守って来たらしいが、昨今の諸事情により変形した部分もあるようであった。木像は元来、個々の家で作ったが、現在は、シバオコシと呼ばれるムラの旧家格の一、二軒のみで作られている。アーボ・ヒーボは他地域と同じく堆肥場に立てられていたものが、釜神の所にミニチュアとなって飾られている。釜神は「生活の中心の神」と言われ、お飾りの中心としているのも特徴的である。「つくりもの」の材料のミズブサの木は火防の木として古くからの縁起があるので使用するのだと伝えている。事実、この木はカギ竹の竿に使っているものだと言っている。「つくりもの」の中で、一番初めに作らなければならないものは、神々に供えるケズリバナ百本であった。それとハナカキナタを一緒にシ■ウギに入れて年神棚に供えておき、他のものは次にと、ものつくりの順序が明らかであった。

二、山　入　り

「山入り」の日は正月二日と決まっていた。

供えものとして、モチを一重ね・オサゴ・シメ縄を持ち、半紙をやぶいて、生木の枝に吊して御幣とする。

御幣がエトの方向に向くように祀り、エトの反対の方向に向いて拝む。

どこの山へ行くかは、特別に決まっていない。日常見てあらかじめ決めておく。（材料の具合で見当づける）

木の切り方は別に決まっていないが、エトの方向に向いて切り始める。

切る木は、オッカド・コメゴメ・ミズブサ・ヤマクワである。

切った木は、束ねて担いだり、背負って来る。ツルフジで束ねるのは、昔からのならわしである。

運んだ木の置き方は別にない。家の外に置く。

三、木　の　種　類

(一) 「つくりもの」に使用する木

ハナには、コメゴメの木を用いる。一年で長くのびるので縁起がよい木とされている。箸にする木である。「つくりもの」には、オッカドの木を使う。この木は細工がしやすい木とも言われている。

(二) マユダマをさす木

年神のマユダマの木には、ミズブサの木、オシラ様のマユダマの木には、ヤマクワの木、または、在来種のクワの木の株を使う。他のマユダマの木は、神棚にはミズブサ、他はヤマクワの木を使う。家の外に供えるものも、ミズブサの木にさす。

四、作る日・場所・道具

ものつくりの日の名称は別にない。

ものつくりをはじめる日は正月八日で、この日は山仕事を行わない日となっている。仕上げは正月十二、十三日までである。「農をする日」とも言った。霊符祭りをする日で、法印を頼んだ。

作る場所は、台所または軒下である。

道具には、ハナカキナタ（中之条町の甲州屋）（写真64）・枝打用ナタ・ノコ・コガタナ・ツチ（カヤの木）・ヘギワリナタを用いる。

作業台には、クリの木の台（戦前より使用しているもの）（写真65）を使用する。

作ったものは、箕またはシ■ウギ（写真66）を使って入れて、お棚に上げておく。（写真67）

五、ものつくり

写真64　中央は自家製

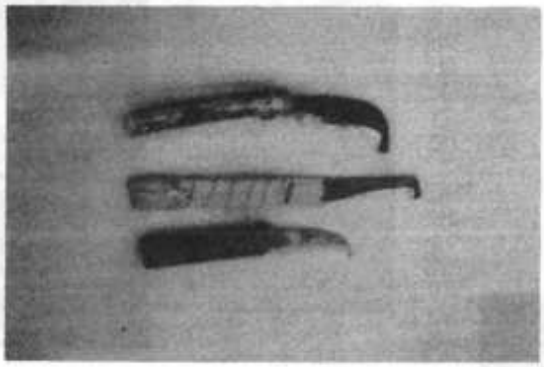


写真65　軒下でのハナ作り

(一) ハナの作り方

手前に引く方法で作る。元の方は皮をつけたままで、先の方は皮を削り、その下の部分を削り、一段のハナに仕上げる。一段のもの百本、同様に長さ二十八センチメートルのものを三十本作る。

(二) カユカキ棒の作り方

オッカドの木を使い、ハナカキナタで作る。(写真68・69)

作り方は、長さ二十三センチメートル位、直径六・五センチメートル位の材料を使い、下の部分を枕状に削り、上の部分は四つ割りにした。その四つの側面に削りを入れ、ハナを四個所につける。材料の皮は全部削る。

作る順序は、①上部に十文字の割り込みを作る、②下部を枕状にする、③皮を削りとる、④ハナをかく、の順である。

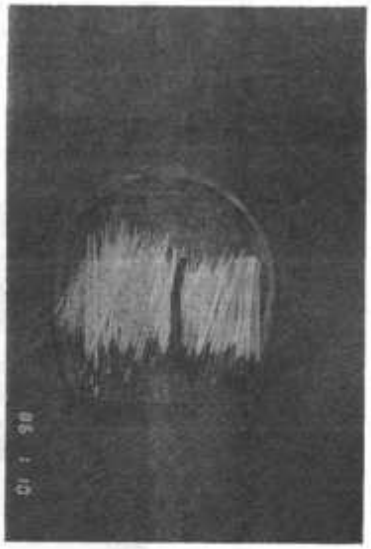


写真66 「つくりもの」を入れたシ■ウギ

写真67 年神棚の上にある「つくりもの」

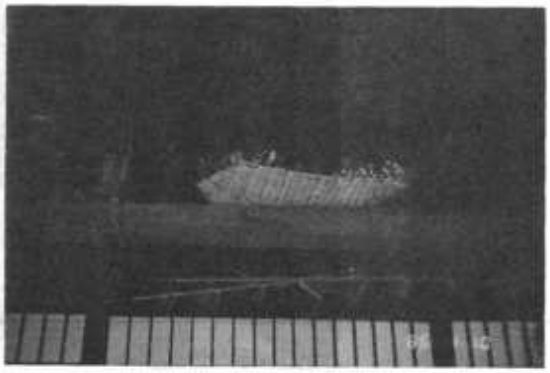


写真68

写真69

写真70　台の上でオッカドを作る

(三)　ハラミバシの作り方

オッカドの木を使い（写真70）、仕上り寸法は、長さ約二十四センチメートル、最大幅約三センチメートル、厚さ約〇・八または〇・九センチメートルである。（写真71）

作り方は、オッカドの木を約二十四センチメートルの長さに玉切り、これを二つ割りにしたものを更に二つ割りとし、厚さ約〇・八～一・〇センチメートル程度のものとする。この両端を日常の箸の太さに削り、中央部（最大幅約三センチメートル）をふくらませた形として仕上げる。本数は家族が全員で使用できる箸の数に一本を加えた数である。

(四)　アワ俵・ヒエ俵の作り方

名称は、コメ俵・ヒエ俵と言い、材料はオッカドを用いる。

作り方は、オッカドの太いものを割ってマキのようにして作る。二、三束、長さは七十～八十センチメートル位、三個所を縄で束ねる。この一本一本は、「俵木」と呼ぶ。本数は決まっていない。

作ったものは蔵の軒下に積んでおく。（写真72）

(五)　アーボ・ヒーボの作り方

材料にはコメゴメの木を使う。大きさは、長さ二十三センチメートル、直径一・八～二・〇センチメートル位である。

作り方は、上部に削りを入れる。大体四本ずつ入れる。アーボ四本、ヒーボ四本を作り、アーボの四本は皮をむいて削りを入れる。

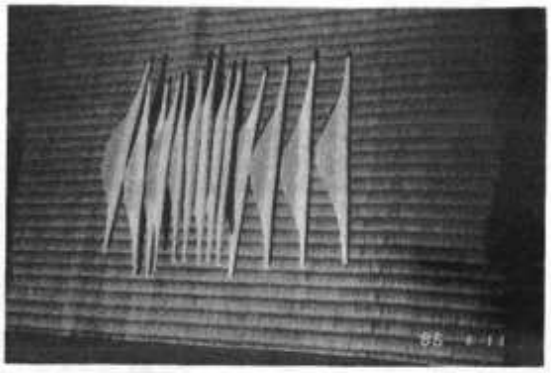
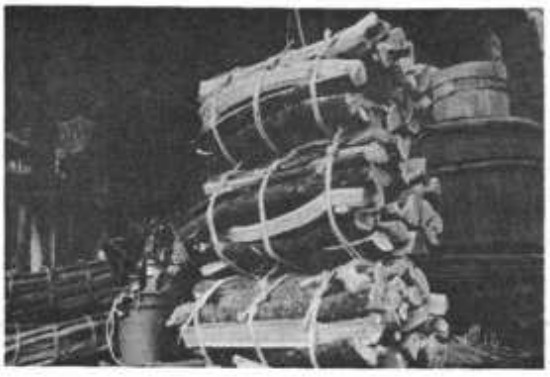


写真71

写真72　蔵の軒下におく



ヒーボはそのままで削りを四つ入れる。竹の先を割って八本作り、その先端にアーボ・ヒーボをさし込む。（写真73）

（六）農具の内容と作り方

材料はオッカドで、エンガ・テンガ・カマ・マンガ・ノコギリ・ヨキ・立臼・キネ・包丁・ナタ・ツルバシなどを作る。他の「つくりもの」の残りや切れ端で作る。材料により適当な大きさに仕上げる。立臼は麻紐で吊す。他は紐にさしたり、結んでおく。（写真74）

（七）麻尺の作り方

現在は作らない。昔はしの一種（ダイミウジ）の一年ごで作った。麻は六尺五寸だったから、それ以上の長さが必要となる。

写真73

（八）マユダマの作り方

材料の粉は現在は米の粉だが、昔は雑穀の粉（ヒエ・トウモロコシなどの粉）を使った。粉は、年が明けてから挽き、新粉と言った。マユダマは、大体正月十二日頃まるめて作り、十三日にさして飾る。オシラ様のもの十六個、マユの形のもの五個、宝珠の形のもの五個、丸形のもの六個を作る。これらはゆでる。他のものは同じマユの形で、ふかして作る。オシラ様のものは、ゆでてシ■ウギに入れてさす。他のものはふかして木鉢に入れる。マユダマのさし方は、先端がでないようにさす。

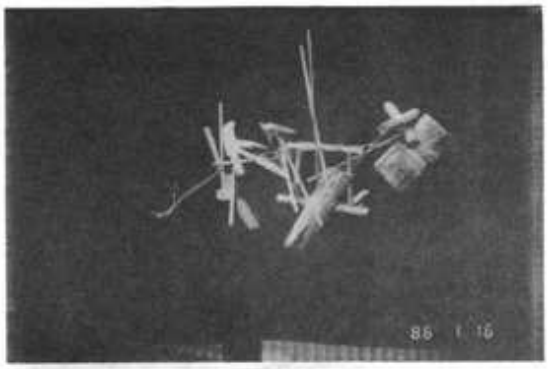


写真74　農具（ナタ・マンガ・テンガ・クワ・ノコ・キネ・臼など）　臼には釜神大明神と書く

六、お飾りかえ

大正月の松を七日の朝とり、それから準備をしておいて正月十三日に飾りかえをする。

（一）ハナの供え方

一段のハナとマユダマを以下の所に供える。神棚（写真75）・仏壇・エビス様・馬屋の神（写真76）・便所神・玄関・門口（写真77）・屋敷神・土蔵・堆肥舎・作業所・井戸神・

墓地（ただし、マユダマは一本のみ）・道祖神（一段のハナのみ）・オシラ様（マユダマは十六マユダマ）（写真78）・十二様・氏神様（一段のハナのみ）。

一方、年神様には、ヤマクワにマユダマをさして供える。（年神棚には飾らない）。また、一段のハナも供える。

また、釜神様には、一段のハナ、アーボ・ヒーボ、農具一式を供える。（写真79）

床の間はなく、茶の間の隅にヤマクワにマユダマをさして供える。（年神棚に同じ）

写真75

写真77

写真76

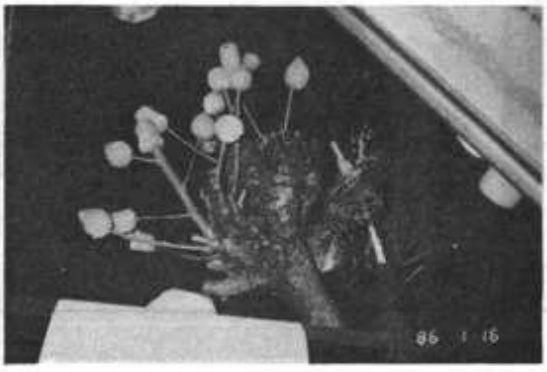


写真78

(二) アワ俵・ヒエ俵の供え方

「俵木」にはささない。別扱いである。農具は釜神様の所に飾り、「俵木」は蔵の軒下に置く。二、三俵を重ねておく。これは一年間、そのままにしておき、翌年のマユダマ作りの時に燃料として燃やす。

(三) アーボ・ヒーボの供え方

釜神様の所に置く。昔は大きいものを作り、堆肥場に立てた。

(四) 農具の供え方

釜神様に供える。釜神は生活の神だから、道具・穀物（ムギ穂＝さげ穂のこと）を作り供える。

農具は一つ一つだんだんに結び吊す。このうちの臼は、穀物を精白にする大切なものという意味ぐらいしか使わない。

(五) マユダマの飾り方・供え方

神棚には、ミズキ（ミズブサ）の木にマユダマをさして飾る。三個所に供える。

年神様には、ヤマクワの株で、よくのびた枝のあるものに、マユダマをさして飾る。座敷の隅に置く。（写真80）

オシラ様へは、数は十六個、形は三通りで、丸い形のもの六個、マユ形のもの五個、中央がくびれたマユの形のもの五個を、クワの木の株の部分にさして供える。また、クワの木は、一株から十七本の枝の出ているものを使う。在来種のクワの木のものは多く出ていた。しかし、現在の品種は少ないので使えない。オシラ様のマユダマは、十七日に下げることになっている。

(六) その他

木像の作男・作女はシバオコシの家で作っており、小正月になると持って来て

写真79

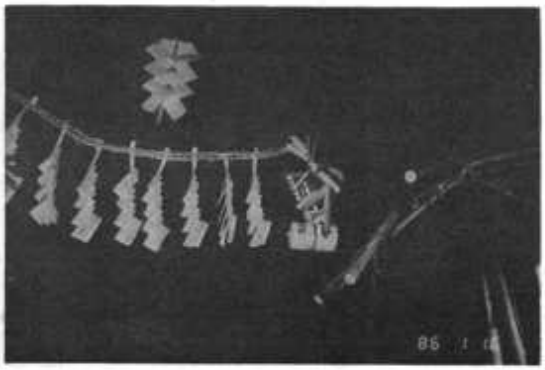


写真80　ヤマクワの木にさしたマユダマ

供える。（ドンドン焼きの場所）一軒か二軒のみである。

七、小正月行事とのかかわり

(一) 十五日粥と「つくりもの」

カユカキ棒の使い方は、粥の中をこの棒でつき、最後に逆さにして（十文字に割り込みをつけた方）粥の中に立てて、そこにコメ粒がつくほど、その年は豊作だと占った。唱えごとは別にない。そして、年神様に供えたヤマクワの株の所に立てかけておく。

ハラミバシは、それを用いて家中で十五日粥を食べ、使用したものは再び神棚に置く。その後、苗代の水口に並べて立て、ゴミ除けとする。

(二) 十六日の行事と「つくりもの」

十六日には、千匹粥をつとに入れて、三本辻に出すことはあった。その日、墓参りをする。家中の者が朝、アラレを持って行く。千匹粥を辻に出してから行く。

(三) マユカキ

オシラ様のマユダマは十七日に取る。他のマユダマは十九日の朝に取り、「二十日正月の風にあわせるな」と言われていた。マユダマを入れる器は昔からオヒツに入れた。昔は、マユダマを焼いて草刈に持って行くと蛇にかまれないと言われた。

(四) その他

成り木責めは、昔はあった。ナタで傷をつけるまねをした。

(五) 小正月の飾りもの・供えものの片づけと処分

十七日と十九日、二十日正月の朝食後一年中使用する荷縄・背負い縄・たずななどを作った。

また、「つくりもの」の最終的処分は、ハナの場合、それで二十日正月にお茶をわかすのみである。

（阿部　孝）

唐沢姫雄家のつくりもの

一、概　観

唐沢家は、大字五反田の中央、中村地区にあり、二十九戸で構成されている。道祖神が二体あり、上組と下組にわかれる。上組道祖神は十三戸、下組道祖神は十六戸となっている。唐沢家は上組に所属している。

小正月の各行事と「つくりもの」は、各々の家の神・仏とこの道祖神を中心として、一年の幸せを祈願して行われている。

中村では、ほとんどの家が「ナゲバナ」・「ハラミバシ」・「カユカキ棒」・「マユダマ」を作っているが、昔からの伝統は失われているのが現状である。

二、山　入　り

「山入り」は、正月四日（年により五日）にする。（写真81）

供えものとして、ノシモチを二つに切って半紙に包み持って行く。御幣は作らない。

最初に切る木の前に、包んでいった半紙をひろげ、その上にモチを供える。

山は、自分の家の持ち山へ行くことが多い。家からの方位などは決めていない。

木を切る時、特に決まった切り方はしない。倒す方向を定めて木の元から切り倒し、使える部分だけ残して枝などを切り落とす。

切る木は、オッカド（ノデンボウ・ヌルデ）・ヤマックワ（ボクの木・ヤマボウシ）・エゴンボウ（エゴの木）である。

切った木は、肩に担いで運ぶ。

家での扱い方も、特に決まってはいない。物置きなどの土間に一ヶ所にまとめて置く。

写真81　十二様へモチを供えて拝む

三、木　の　種　類

切ってきた木は、ハナには、ミズブサ(ミズキ)、「つくりもの」及び木像には、オッカド（ノデンボウまたはヌルデ）を用いる。一方、マユダマ（メエダマという）をさす木は、エゴンボウ（エゴの木）を用い、座敷を飾るマユダマの木には、ヤマックワ（ヤマボウシ）を使う。オシラ様には、特に供えてはいない。

四、作る日・場所・道具

ものつくりの日に対する特別の呼び方はないが、「小正月のつくりものをするか」と言うようなことで作る。

ものつくりの日は、特に決めてはいないが、大体正月十一・十二日に行う。行う場所は、エンガワ・作業場など陽あたりのよい所、または家の台所などで行う。

使用する道具は、ノコギリ・ナタ・ハナカキナタ・キリダシ・ハナバサミまたは剪定バサミなどで、台は特に決まったものはなく、柱の切り落しのような四角の木を使う。

木像は、オッカドを適当な長さ（約十五センチメートル）に切り、皮をむいて表面が乾いたら、墨で顔を書く。

作ったものは、入れものなどには入れず、年神様の棚に上げて置く。

五、ものつくり

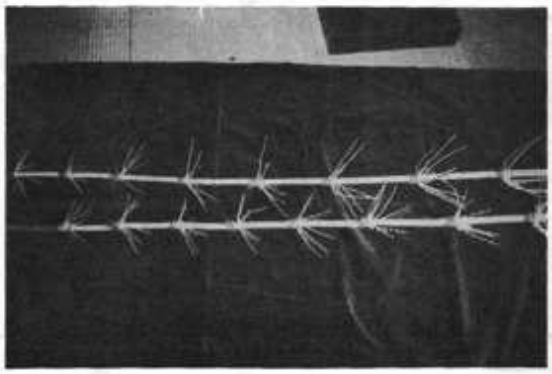
(一) ハナの作り方

ジュウロク（写真82）は、ニワトコの節と節との間に八段にかいたものを二本作り、一組とする。

※ これ以下のハナは、毎年、近くの富沢義真喜氏（吾妻郡中之条町大字五反田二七七）が作ったものである。

富沢氏は、道具にノコギリ・ハナカキナタ・キリ・ナタを使用し、「山入り」の日にミズブサを切って来て（前年から来年のハナの木にするものの目ぼしをつけておく）、ナタで皮

写真82



をむいて乾燥させる。乾燥のころあい（程度によってよくできたりできなかったりする）をみて作る。

〈ホダレ〉

エンガワの柱の根などにミズブサの元の方をつきおさえ、木の末には芯にキリをさし込んで持ち固定し、ハナカキナタで、たれる部分が螺線状になるように作る。これは一人でできる。

〈ノ　シ〉

ホダレの螺線状にたれる部分をのびた形に作る。ハナカキナタで、引きはじめた所を他の一人が持ち、引き終わったところで手からはなす。これを一回転以上引いてから中心の部分を切りはなす。

〈クルマッバナまたはキクバナ〉

ホダレやノシを作ったあとの材料でこのハナを作る。

ホダレの螺線状のものを短かくすると木を中心にして車または菊の花のように作れる。これを竹を割って先を尖らせて、それにさし込んで作る。

〈ナゲバナ〉（写真83）

ホダレ・ノシ・クルマッバナを作ったあとのミズブサの木から作る。ハナカキナタで短かい螺線状のハナを引き、五回目に木からはなれるように引く。（以上が富沢義真喜氏の作るハナである）

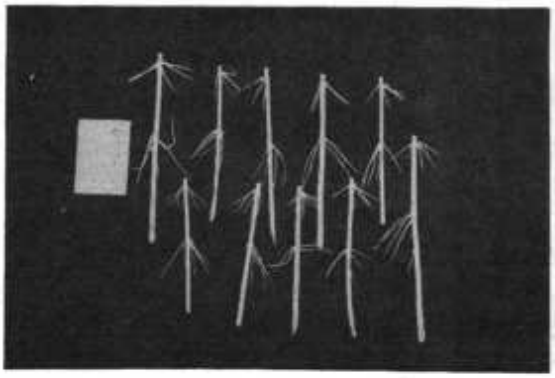
(二)　カユカキ棒の作り方（写真84）

オッカドの木を二十センチメートル位の長さに切り、ナタで皮をむき、木の末の方を尖らせるように削り、元の方の切り口を十文字に割れ目をつける。（写真85）

(三)　ハラミバシの作り方（写真86）

オッカドの木を約二十～二十五センチメートル位に切り、皮をむいて細く割り、木の中ごろの芯にあたる方をふくらむようにナタで削り、両切り口を尖らせる。ハナカキナタで木の皮に面した方に二回ハナをかく。（写真87）数は家族の数の他に年神様の分を二膳、その他

写真83



に客の分として二膳ほど作っておく。

(四) アーボ・ヒーボの作り方

オッカドの木を約二十五センチメートル位のものを十六本切り、うち八本は皮をむき、他の八本は皮をむかない。これを竹を末の方から途中まで十六本に割り、その先を尖らせて、皮をむいたもの（アーボ）と皮をむかないもの（ヒーボ）が交互になるように竹の先にさし、これを堆肥（コイニワまたはコイヤ）の上に立てる。（写真88）

(五) 道祖神の作り方

オッカドを約十五センチメートル位に二本切り、皮をむく。木の表面が乾いた時期をみて、墨で片方は男子の顔を、一方は女子の顔を書き、その下に「奉納道祖神」、右側に「昭和六十一年」、左側に「唐沢氏」と書く。

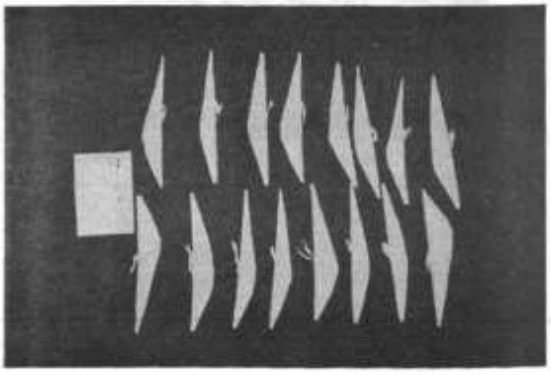
写真85　ケエカキ棒ともいう

写真84

写真86

写真87

写真88



(六) マユダマ（メエダマ）の作り方（写真89）

材料は、コメの粉（昔は石臼で、自家製）を使用し、昔はトウモロコシ・ヒエの粉を使った。八日にコメを洗って干し、十日に石臼で挽いた。現在は、中之条町の製粉所へ頼んで挽く。

十三日の朝から作り、小形の丸い形のものを、神様・仏様・座敷・家の外などに供える。その他大形で宝珠の玉の形のものを八個作る。マユの形のものも八個作る。この十六個を、「ジュウロクメエダマ」という。

ゆで方は、鍋でゆでる。あげるとすぐにコメの粉をつけて「うちわ」であおいでさます。ゆでたものは、木のおひつに全部を入れておき、各人「メンバ」に入れてさす。

神仏に供えるものは、主人か男子、座敷に飾るものは家中でさす。（写真90）

六、お飾りかえ

飾りかえは、正月十三日に行う。

(一) ハナの供え方

神棚（写真91）・仏壇・屋敷神（写真92）・土蔵にはクルマッバナとマユダマを供える。

エビス様・馬屋の神・便所神・作業所・井戸神には、ナゲバナとマユダマを供える。

また、堆肥舎・墓地・道祖神などの石造物・社やお堂にはナゲバナを供える。

一方、年神棚には、ホダレとマユダマを供え、釜神（荒神）様（写真93）には、クルマッバナまたはナゲバナ・マユダマを供える。

また、玄関（写真94）には、ノシとクルマッバナ・マユダマを供える。

写真89

写真90　座敷のお飾り

(二) 道祖神の祀り方

道祖神を作り、ドンドン焼きの日まで年神様の棚へ祀っておき、ドンドン焼きに持って行く。

(三) アーボ・ヒーボの供え方

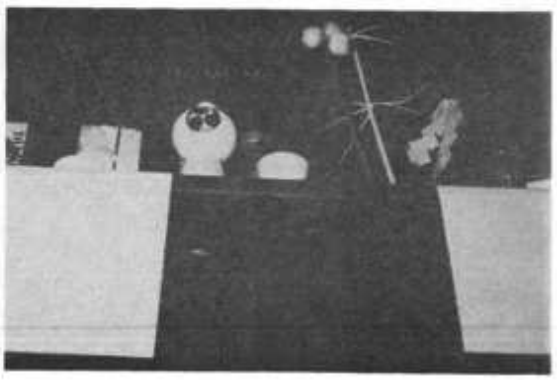
堆肥（コイ・コエ）の上に立てる。地神様に供えるといい、新しく堆肥を積みあげることはしない。アーボ・ヒーボにまつわる行事の話は特にない。

写真92

写真93

写真94

写真91



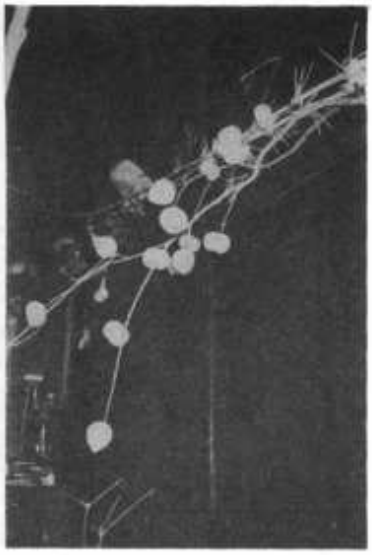


写真95　ジュウロクメエダマ

(四)　マユダマの飾り方・供え方

年神様には、エゴンボウ（エゴの木）にマユダマを五個さして、年神様の棚板を吊してある縄に結びつける。神棚にも同じようにする。

オシラ様へ供えるものは、ジュウロクメエダマといい（写真95）、大形の宝珠の形にしたものを八個、マユの形にしたものを八個、合計十六個のマユダマを座敷のさしがもいに結びつける。

使用する木は、ヤマックワ（ヤマボウシ）の木で、なるべく枝のこんでいる根株のものを使う。竹は使わない。

七、小正月行事とのかかわり

(一)　ドンドン焼きと「つくりもの」

シノダケにモチをさして持って行き、ドンドン焼きの火で焼き、家へ持って帰り、家中で食べる。

道祖神の「つくりもの」をドンドン焼きの火で黒こげになるまで焼き、道祖神に供える。（写真96）

(二)　十五日粥（小豆粥）と「つくりもの」

十五日粥（小豆粥）には、カユカキ棒の十文字の割れ目にモチをはさんで、鍋の中の小豆粥の表面をかきまわしてコメ粒をつける。（写真97）唱えごとは特にない。カユカキ棒は、小正月中は正月の棚に上げて置き、その後は、神棚に上げて置く。そして、稲の苗代の水口（ミナクチ）に立てる。

一方、ハラミバシは家中で小豆粥を食べる際に用いる。（この時、口で吹いて食べると、田植の時に風が吹いてよく植えられないという。だから、吹かなくても食べられるようにさ

写真96

ましてから食べるようにしている）ハラミバシは、小正月中は正月の棚に上げておき、その後はお勝手の高い所において、後に苗代（ネエマ）の水口に立てる。

（三）マユカキ

マユカキの日は正月十八日で、取ったマユダマはおひつなどに入れる。マユダマに関する以下のような話がある。①二十日の風にあわせてはいけない（理由はわからない）。②昔は、マユダマを袋や俵に入れておき、蚕を飼う時の間食にしたという。

（四）小正月の飾りもの・供えものの片づけ

全て、一月十八日のマユカキの日に片づける。

（五）「つくりもの」の最終的な処分

ハナ・ホダレは、二階や物置などに片づけておき、蚕の「初ズウ（熟蚕）」をつけるまぶし（初まぶしという）に使う。

また、箸にまつわる話として次のような話がある。① ハラミバシは大きい稲穂になるように願うものである。②苗代（ネエマ）の水口に立てて、よい苗ができるようにと願った。

一方、養蚕とのつながりでは、ハナ・ホダレは、初シキリ（初ズウともいう＝熟蚕のこと）を拾った時に「初まぶし」と言って、これに熟蚕をたける。

その他、正月の棚は二十日の風にあわせるなと言って、朝なるべく早く片づける。大きな声で「天地にひびけ」と唱えて、座敷から庭へほうりだす。また、正月の棚板は、毎年新しいものをひいて使ったものであるが、最近は毎年同じものを使うようになった。

また、マユダマをヤマックワの木にさして座敷に飾るが、その時花菓子を中之条町の一月十一日の市（ボク市という）で買って来て飾る。この花菓子は、高崎市九蔵町九五番地、八間道路と呼ばれる所のもなかや「美濃屋」の作ったものである。昔は、何軒もの店がでたが、現在は、この「美濃屋」一軒になってしまったという。大事な仕事だから、できるだけ続けたいと言っていた。

（奈良秀重）

写真97

松井次郎家のつくりもの

一、概　観

松井家は、大字大塚の西に位置し、「小正月のつくりもの」は、各々の家の神・仏と小丸山の道祖神を中心にして行われている。この小丸山の道祖神を祀る戸数は二十戸である。

昔は全部の家で「つくりもの」が行われていたが、現在では簡略化されて、「ナゲバナ」・「ハラミバシ」を作る家も少なくなってきた。

この松井家は以前から伝統を守り、毎年行っているものである。

二、山　入　り

一月二日の朝、朝祝い（アサイエェという）を済ませてから出掛る。

半紙を二枚持ち、山へ着いたら細い木を適宜の長さに切り、紙を手でちぎり御幣を作り、その木に結びつける。また、ノシモチを四角に切ったものを二個半紙に包み持ち、半紙を台にして供える。そして、頭を下げ、かしわ手を打って拝む。（写真98）

「山入り」の方向などは決まっておらず、大体北の方向へ行き、ほとんど自分の山の木を切って来る。

木の切り方は、年神様の方向へ向かないようにして、「ノコギリ」・「ナタ」などを使って切る。切って来る木は、以下の通りである。（写真99）

ヤマックワ（ボクという）・オッカド（ヌルデ・ヌルデンボウまたはノデンボウという）・ミズブサ（ミズキ）・コメゴメ・ムラサキシキブである。

写真98　十二様へモチを供え、御幣をあげて拝む

写真99　オッカドを切る

これらを背に負うか、担いで運ぶ。特別の取り扱い方はせず、置き方も決めていないが、陽のあたらないような所へ置く。

三、木の種類

切って来た木は、ハナには、ミズブサ（ミズキ）・コメゴメ・ムラサキシキブを用い、「つくりもの」及び木像には、オッカド（ヌルデ・ヌルデンボウまたはノデンボウ）を用いる。

一方、マユダマをさす木は、年神のマユダマの木・オシラ様のマユダマの木・座敷に飾るマユダマの木・家の外に供えるマユダマの木、以上いずれもヤマックワ（ヤマボウシ・ボク）を用いる。

写真100　左からハナカキナタ・キリ・ナイフ・カナヅチ・ノコギリ・ナタ

四、作る日・場所・道具

松井家では、ものつくりの日に対する特に決まった名称はなく、またものつくりの日も決まっておらず、暖かい日を選んでする。作る場所は、エンガワで、道具には、ナタ・ノコギリ・キリ・小刀・ハナカキナタ・カナヅチを使う。（写真100）

台には、四角の棒（柱の切り落としなど）を使い、作ったものは、木の箱（今はダンボールの箱）に入れ、座敷の床の間のあたりに置く。

五、ものつくり

(一)　ハナの作り方（一段・二段・三段）（写真101）

一段作り（大）のハナは、ミズブサ・ムラサキシキブの直径二センチメートル位、長さ四十センチメートル位のものに一段に作る。（神棚・年神様・仏壇に飾る）（写真102）

写真101

一段作り（小）のハナは、コメゴメ・ムラサキシキブの直径五～八ミリメートル位、長さ二十五センチメートル位のものに一段に作る。（外回り・門松・イナリ様・墓地などに供える）（写真103）

(二) ハナの作り方

ホダレを三段に作る。（写真104）コメゴメの木を二本にかいて作る。木の元から三段に、七回・五回・三回かき、七・五・三に三段にかいて作る。（写真105）

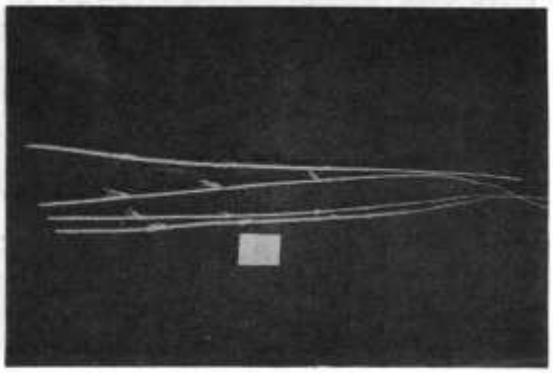


写真 105

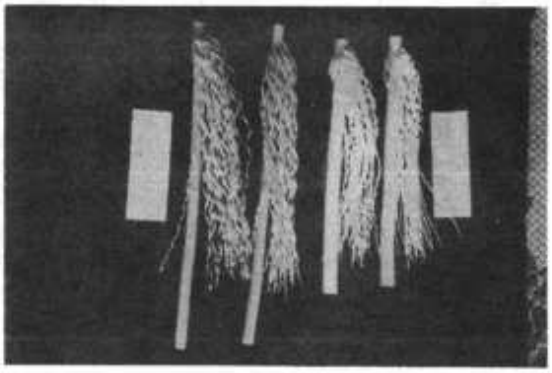


写真 102　内飾りのハナ
左：ムラサキシキブ（２本）
右：ミズブサ（２本）

写真 103　外飾りのハナ

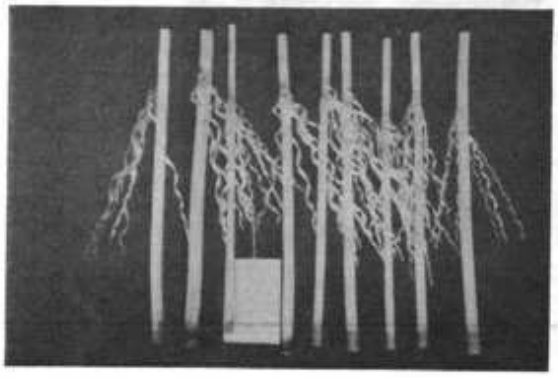


写真 104　ホダレ作り

(三) カユカキ棒の作り方

オッカドの直径五、六センチメートル位、長さが三十センチメートル位のもの二本、木の末をナタで尖らせ、元の方を十文字にナタで割れ目をつける。（皮をむくが、ハナはつけない）（写真106）

(四) アーボ・ヒーボの作り方

オッカドを使う。長さは約二十センチメートルほどで、皮をむいたもの（アーボ）を四本、皮をむかないもの（ヒーボ）を四本、合計八本作る。（写真107）

(五) 農具の作り方

カマ・テンガ・ヨシゴ・ツルハシ・ナタ・ショベル・アラクワ・クサカキ・ヨキなどを作り、オッカドの木を使い、ナタ・ノコギリナイフ・キリなどの道具で作る。（写真108）

(六) 道祖神の作り方（写真109）

太めのオッカドを上半分を二つの山形に削り、男（右側）・女（左側）の顔を書いて作る。

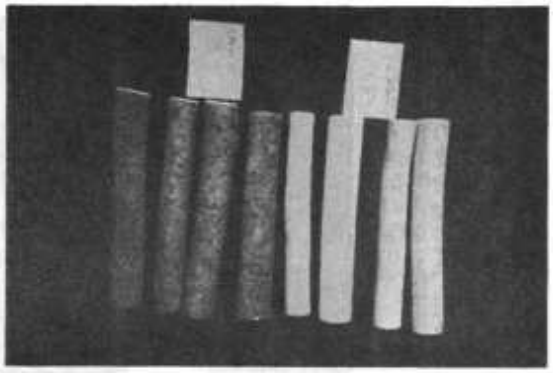
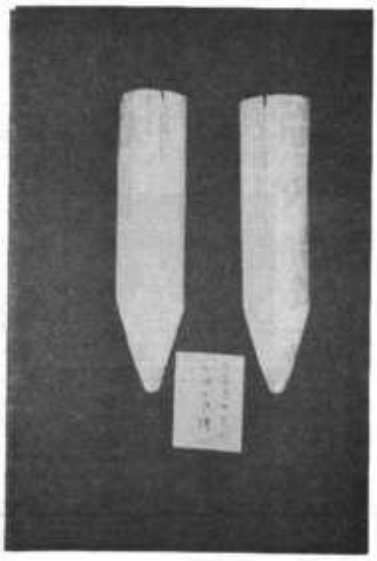


写真107

写真106　ケエカキ棒ともいう



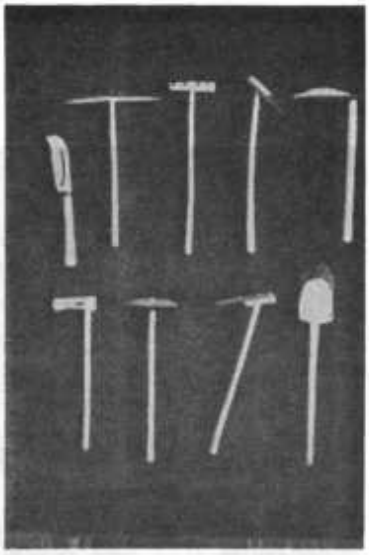


写真108　左上からツルハシ・ヨツゴ・クワ・カマ
左下からヨキクサかき・アラグワ（開墾鍬）・シャベル

(七) 作男・作女の作り方

オッカドの皮をむいて、三分の二位の所にノコギリで切れ目を入れ、下の方から「ナタ」で切れ目まで削りを入れる。三分の一の所に、男と女の顔を墨で書く。（写真110）

写真 109

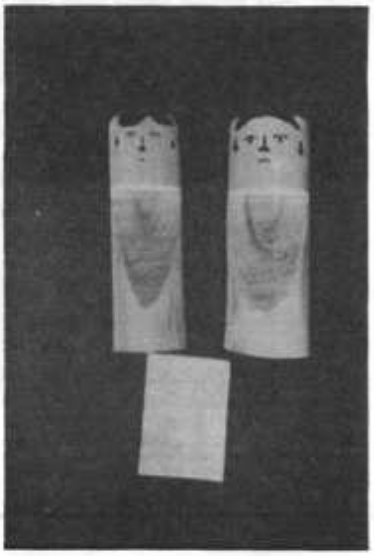
(八) マユダマの作り方

材料はコメの粉（昔はトウモロコシ・ヒエでマユダマを作った）を用い、粉は大正月の終わった七日か八日頃に挽いた。

マユダマは、十三日に作る。ジュウロクメエダマは「マユ」の形に作り、他は全部丸い形にする。

ゆで方は、まず大きい鍋でゆでた後、鍋からシュウギにあげ、そのあとすぐに「うちわ」であおぐ。なお、粉をこねる時は熱湯でこねる。また、マユダマのさし方は特に決まっていない。

写真 110　左:作女　右:作男



六、お飾りかえ

飾りかえは、正月十三日に行う。

(一) ハナの供え方

神棚には、ムラサキシキブのハナ（写真111）、年神棚には、ミズブサのハナ（写真112）、仏壇には、小形のハナ（コメゴメ）、エビス様には、ミズブサのハナ・ボクのマユダマ（写真113）、釜神様には、コメゴメのハナ・マユダマはボクにさす。馬屋・床の間には飾

らない。便所の神には外飾り（コメゴメのハナ）を行い、玄関には、ホダレを横にして飾る。一方、門口には、コメゴメの外飾りのハナを、屋敷神・井戸神・墓地（各石塔ごとに）などにも同様の外飾りのハナを供える。また、堆肥舎（コイバ）には、アーボ・ヒーボを立てるが、道祖神などの石造物には、ハナ飾りをしないが、前の地蔵には、ハナとマユダマを供える。

(二) 作男・作女の供え方

正月十四日に、小丸山の道祖神に供える。作物がよくとれるようにということである。他には何も進ぜない。

(三) アーボ・ヒーボの供え方

コエニワ（コエオキバ）に立てる。地神様に供え、作物がよく育つようにということである。アーボ・ヒーボにまつわる行事の話は特にない。アーボ・ヒーボは、田植の時、こわめし（赤飯）をふかす際に燃やすことになっていた。

(四) 農具の供え方

地神様へ供える。作物がよく育つように願ってのことである。（写真112）

年神様の前に一つ一つ紐で下げて供える。小正月が終わったあと、子供の玩具にした。

(五) マユダマの飾り方・供え方

年神棚・神棚に、ボクの木にさして、左と右に一本ずつ供える。

写真 111

写真 112

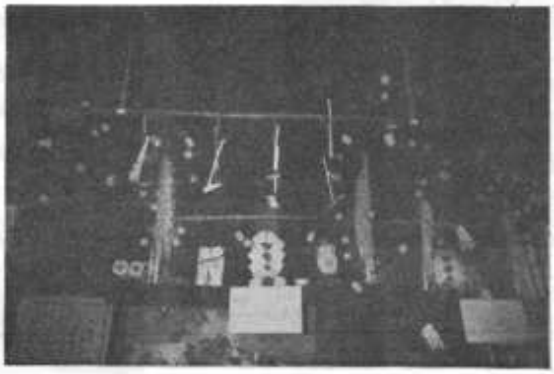
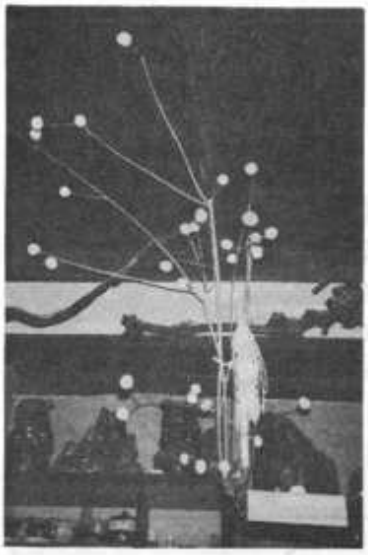


写真 113



七、小正月行事とのかかわり

(一) 十五日粥（小豆粥）と「つくりもの」

カユカキ棒（ケエカキボウ）は、小豆粥を作った直後にカユ（オケエ）の表面をカユカキ棒の割った方でかきまわして、カユを少しつかせる。唱えごとは別にない。カユカキ棒は、小正月中は、正月の棚に上げておき、小正月の終わったあとは神棚に置く。

ハラミバシは、小豆粥を食べるのに使い、小正月中は、正月の棚に、小正月が終わったあとは神棚におく。（写真114）その後、稲の苗代（ネエマ）の水口にカユカキ棒を立てる。田植の時、ハラミバシでこわめしを食べる。田植の終わったあとは、田の水口にカユカキ棒、ハラミバシを立てる。

小豆粥を食べる時に、吹いて食べると、田植えに風が吹いてよく植えられないと言われている。

(二) ドンドン焼きと「つくりもの」

道祖神の「つくりもの」は、年神様の棚に置き、十四日の朝ドンドン焼きに持って行き、「つくりもの」を黒くなるまで焼き、道祖神（小丸山の道祖神）に供える。

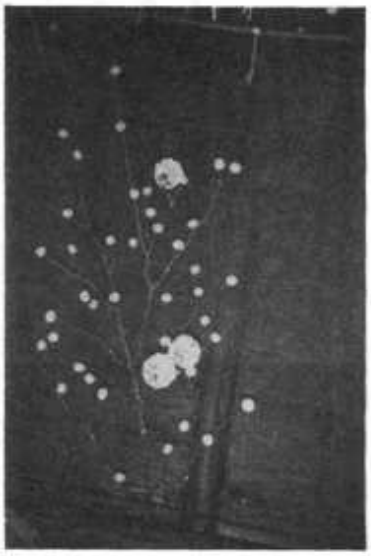


写真115　ジャシキ（座敷）のマユダマ飾り　くすだまが下げてある

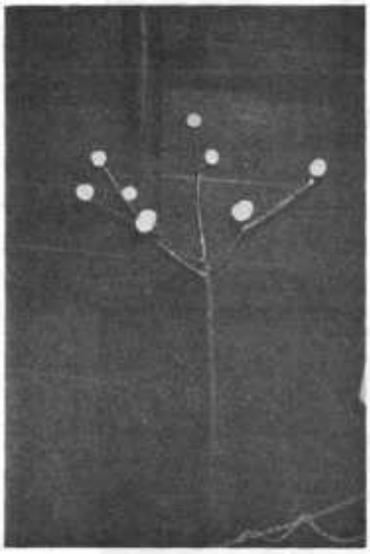
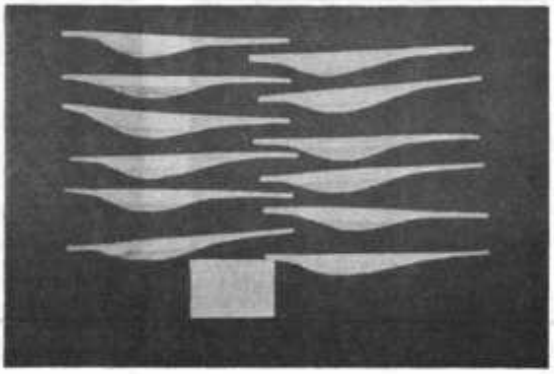


写真116　ドンドン焼きのマユダマ

写真114



ドンドン焼き（オンベヤ）には、ミズブサの枝にさしてジャシキに置いたマユダマ（写真115）を十四日の朝小丸山の道祖神のドンドン焼きの火で焼き、家に持って帰り、家中の者で食べる。これを食べると風邪をひかないと言われている。（写真116）

(三)　マユカキ・その他

正月十八日で取った。マユダマを入れる器は、ショウギなどである。その他、オシラマチ・成り木責めなどはしない。

(四)　小正月の飾りもの・供えものの片づけと処分

正月十八日のマユカキの日に行い、最終的な処分は、ハナホダレは、田植の時に燃やす。箸にまつわる話は特にない。

（奈良秀重）

石川広吉家のつくりもの

一、概　観

石川広吉氏は、他の被調査者と違い、自分の家に飾る「つくりもの」を作るだけでなく、商売としてハナを売っている数少ない一人である。

昔は二十五人位商売として作っている人がいたとのことだが、今では村中に石川氏を入れて三人になってしまった。石川氏が、先祖が隠居に出てから四代目になるとのことであるが、大正十三年、十五才の時から、「つくりもの」を売っているとのことで、今年で六十二年になる。

これまでにも、石川氏の所には、毎年「つくりもの」の調査にいろいろの人が訪ずれており、小正月の飾りも、写真撮影に訪ずれる人のために、毎年きちんと作るのだという。（群馬県教育委員会が製作した映画「群馬の小正月ツクリモノ」にも出演している）

二、山　入　り

「山入り」は正月二日であるが、売るものは十一月の大安の日を選んで山に入っている。村有林に入り、日陰にはえているミズブサの木を切ってくる。その時、十二様（山の神）にお供えをする。供えものは、モチとオサゴで、半紙を手でやぶいて、オンベロ（御幣）にしている。木は、ナタとノコギリを使って、必要な部分だけ切ってくる。運ぶのは、担いで来ている。運んで来た木は、日陰の所に干しておく。乾きすぎて、ハナカキナタの刃が立たなくなることもある。陽にあてておくだけでも乾いてしまうので、乾き具合には特に注意する。家用のものは、稲荷様（屋敷神）の所に、十三日まで置いておいた。

三、ものつくり

ものつくりの日は、石川氏宅では、正月十三日より前の都合のいい日にハナをかいておくというが、十三日を「農の日」・「農のお飾りかえ」と言っている。オシラサマを祀るという。

調査では、玄関で作っていただいたが、いつもは夜、イロリ端で作ったものだという。

道具は、ハナカキナタ・ノコギリ・キリを使っている。（写真117）大きさが違っている。ノコは全長四十九・五センチメートル、刃が二十五センチメートルのものである。ナタは、十七・五センチメートル、十七センチメートル、十八センチメートルのものとある。ハナカキナタは、刃の大きさが、四、六、六・五センチメートルのものと三種類あった。台は、古い家の大黒柱の根を切って使っており、ハナカキダイと言っている。

作ったものは、昔は箱、今はダンボールに入れ、乾く所ということで、二階に上げて置く。木像は作らない。また、カタナ・農具は作らないが、「つくりもの」については、昔はやったという。

ハナには、ミズブサの木を使う。

年神のマユダマは、ヤマクワ（ボク）の木を使うが、ボクのない時は、ミズブサの小枝を使う。家によっては、シラハギというやぶの中にはえる木を使うとのことである。

ハナは、十六段バナを作る。（写真118）二本のミズブサの枝で、一本で八段かき、二本で十六段となる。（写真119）木の元から先へかいている。

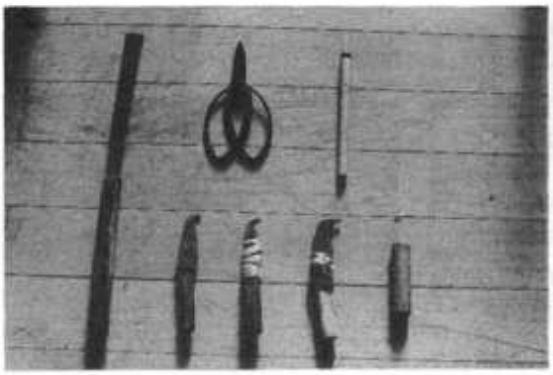


写真 117

写真 118

写真 119

他のハナは、ミズブサで、クルマバナ（オミタマサマ・歳徳神さま用）（写真120・121）、ハナ、一段だけかいた小さなハナであるナゲバナ（写真122）、カメノコという八つを一組に飾るハッシ■ウ神（写真123）、片方を尖らせる地神様のハナがある。（写真124）

カユカキ棒は、十四、十五センチメートルの大きさに作るが、上部は四つに割り、マユダマをはさむというが、下部は枕のように尖らせる。（写真125）

ハラミバシは、オッカドの木を割り、片方だけ中央部分をふくらませて作る。ふくらんだ方を向かい合せにして一組になるという。（写真126）

アーボ・ヒーボは、オッカドで作る。普通の笹竹を立て、枝先を切って、適当に切ったオッカドの木をさす。元は、きちんと竹を割って作っていたものだが、今は七夕飾りのような感じになっている。（写真127）木が乾くと、オッカドが枝から落ちてしまう。

セエノ神、道祖神、作男・作女、案山子神、エビス様については作らないとのことである。

道祖神については、ドンドン焼きとして、昔はやったとのことであるが、やはり火事になってから、やらなくなったとのことである。

写真 120

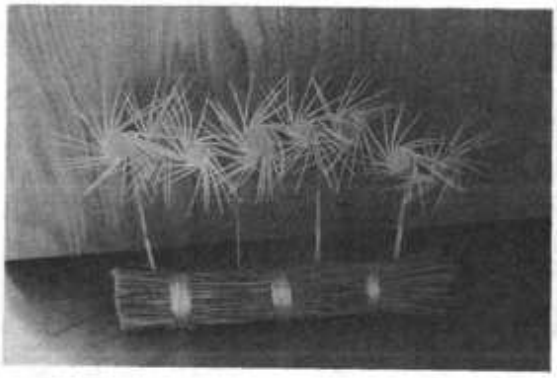


写真 121

写真 122

写真123

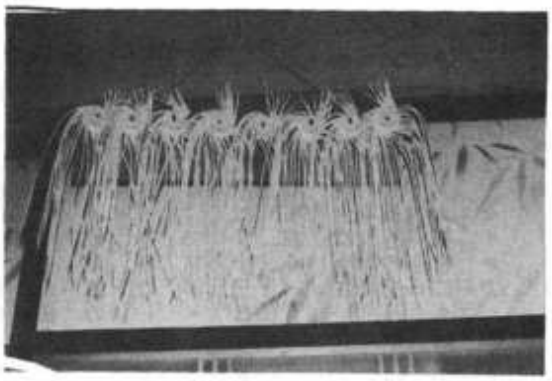


写真126

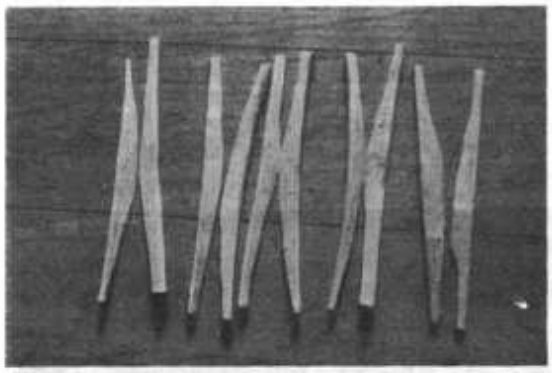
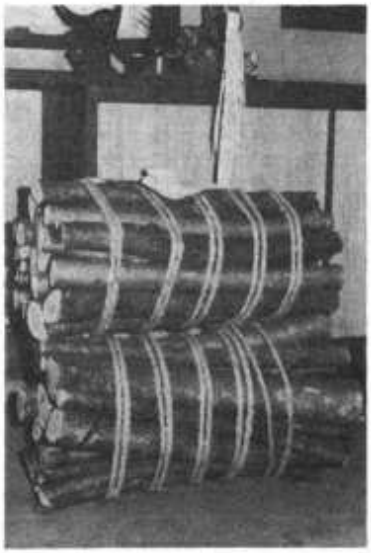


写真124



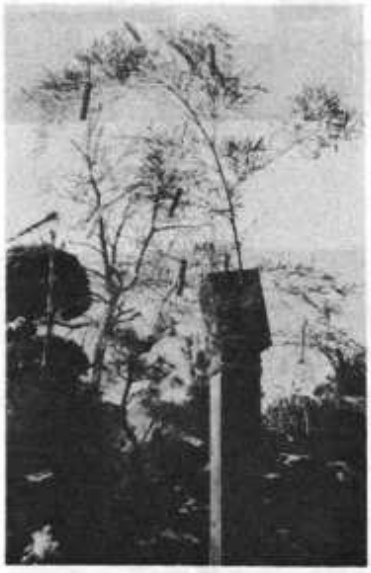


写真127

写真125

四、お飾りかえ

飾りかえは正月十三日である。（写真128）

神棚に四本、正月棚に四本、仏壇に一本、門口に一本（門松に一本）飾る。

門口に供えるものは、カドバナという。墓地・道祖神などの石造物・社やお堂にはナゲバナを上げる。（写真129）

アワ俵・ヒエ俵を十三日に作って土間に置いた。一緒に農具をつけることはない。オッカドの木で作り、マユダマをさした。ハナガシを買って吊した。アワ俵・ヒエ俵は、十七日にとって外に出し、田植の赤飯をふかすのにこの俵を燃やした。

アワボ・ヒエボは堆肥の所に立てていた。十三日に作って、オッカドの皮をむいたものを八本、むかないものを八本つけた。地神様に供えるという。新しく堆肥を積みあげる。アワボ・ヒエボの行事の話についてはない。

マユダマはやはり十三日に作る。（写真130）材料の粉はコメで、都合の良い日に洗って乾かしておく。昔は、トウムギ・チョウセンムギ・ヒエなどを作った。

年神のマユダマは小さい普通の玉、オシラ様には大きいもので、玉が八個、マユの形をしているものを八個つける。

他に、俵神・大神宮にも飾るが、これは小さい普通の玉をつける。

ふかすのは、セイロで、ふかしあがったものをシ■ウギに入れておいて木にさす。

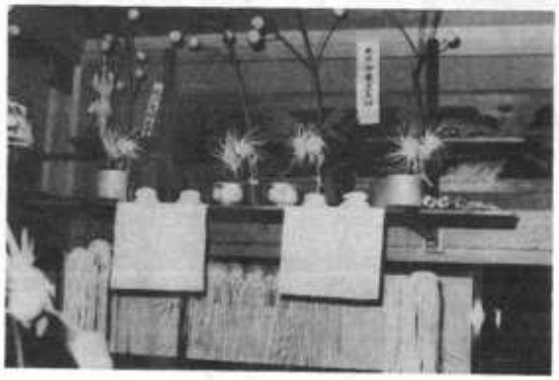


写真128

写真129

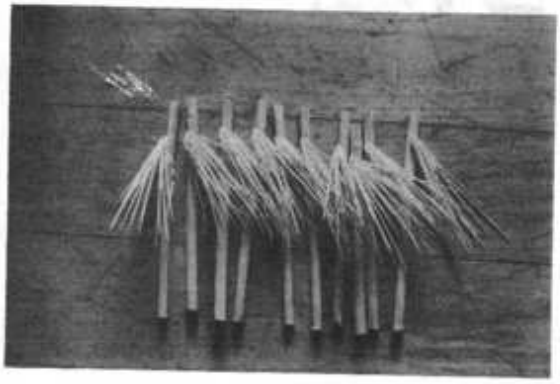


写真130

枝の先を切り（ツメをとるという）、玉にさす。

五、年とり（十四日年）

オシラサマは、昔はあったが、今はやっていない。

オミタマサマは、歳徳神といっしょにハナを作って飾った。向かって左がオミタマサマで、右のものが歳徳神であるという。

六、道祖神とドンド焼き

ドンド焼きは、昭和三十年頃までやっていた。大火を機にやめた。今はやっていない。

七、十五日粥と「つくりもの」

カユカキ棒は、オッカドの木を削って作るが、四つに割ったところにマユダマをつけて粥をかき回すのに使う。つけたマユダマを福玉という。使ったあとは、神棚に上げて置く。

カユカキ棒は二本であるが、これは苗代の水口にさして置く。

ハラミバシは、使ったあと、お勝手の棚の上に上げておき、苗代の水口のカユカキ棒の先にさして置く。

八、マユダマカキと片づけ

マユダマを取るのは、正月十六日で、ボク休めという。

マユダマは適当な入れ物に入れておいた。マユダマに関する話はない。

十六日に片づけたあと、二十日にボクを燃やすか、その灰をまくと、長虫が入らないという。

十六日のマユネリで取ったマユダマは食べる。

カカシを立てることはない。

墓参りは十四日にワカモチを持って行った。

この墓参りは「先祖へ御年始」という。また、マユダマをゆでた汁を、実が成るように柿の木の根にかけた。

九、養蚕と「つくりもの」

昔は、オシラマチをしたこと、オシラ様へ大きなマユダマを上げている点に、養蚕に対する願いをみることができよう。

十、稲作と「つくりもの」

石川氏宅では、俵神様・地神様を祀っている。

西の入口から入った土間に飾るものだが、ハナとマユダマをさし、お供えを上げる。

米・麦・アワに実が入るように願うものという。燃やして片づけるという。

十一、その他

ナガムシ除けについては、六月一日、マユダマを牛の朝草刈りに行く時に食べて行くとナガムシにかまれないという。

花ムスビをするのも同じ魔除けであるという。

十二、まとめ

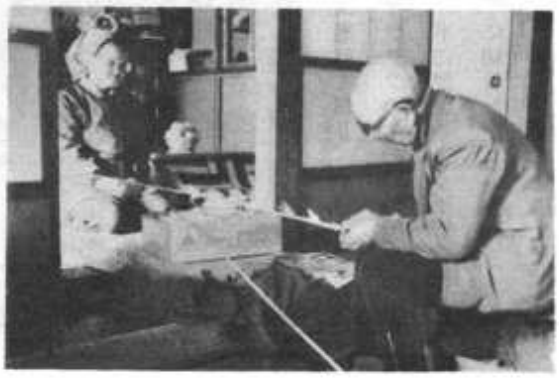
正月十一日の中之条町のボク市（写真131・132）、正月十二日の渋川市の初市には、石川氏は店を出している。ここでは、市でハナを買いもとめ、玄関にハナを飾る家がまだみられる。一度前橋へ売りに行ったが、全く売れなかったとのことである。（写真133）

（井野修二）

写真131　（中之条町のボク市）

写真132　（中之条町のボク市）

写真133　行商し、ハナを売る（子持村で）



後藤省三家のつくりもの

一、概　観

後藤省三氏は、子持村の前村長（村議・村会議長をへて、村長になる）で、現在、村長職を退いたが、まだまだ多忙である。

「つくりもの」は、祖父が作っていたのをみておぼえたとのことであるが、今はもうほとんど作らず、調査のために、昔を思い出して作っていただいた。

後藤家は正月のモチをつかず、正月二日にモチをつくというモチなし家例であったが、今は元日につくように変わった。

写真135

二、山　入　り

昔は正月六日、今は二日、夜の明けないうちに子持山の上の方で切って来た。（写真134）六キロメートル位離れており、歩いて行った。終戦前まで、オノの入っていない山があり、百年以上たったヤマクワの木のいい所を切って来た。これはマユダマの木にした。この木は事前にマユダマの木に使えるように形を作っておいた。ナタで三分の一位切りかえしを入れて切ると、割れずに切れた。

木を切る前に、木の先に手で半紙をちぎった御幣を上げ、コメ・煮ぼしを供えた。この時は、その年の無事を祈るという。（写真135）

木はノコギリとナタで切るのだが、座敷にいっぱいになる大きさのものであるから、山の中をしょってくるのは大変だった。

子持神社まで、荷車で行ったので、そこからは車に乗せて来た。

木は、蚕室の邪魔にならず、また、きれいな所に置いた。

写真134

帰ってから、ニワトコ・オッカドの木を切り、乾かしておいた。ニワトコでハナを作り、オッカドで、アワボ・ヒエボを作った。一年生のミズブサでハナを作ることもある。

マユダマの木は、年神・オシラ様・座敷に飾るもの全てヤマクワの木を使う。

三、ものつくり

ものつくりは、小正月の少し前の大安の日を選んだ。十四日の飾りかえの前のよい日である。

昼間、納屋で、ハナカキナタを使って作った。（写真136）

台は、マキのすわりのいいものを使い、作ったものは、大きいフルイに入れ、床の間に置いておいた。

ハナは三種類作った。

二段のものは、四十ほど作り、あちこちに供えるのに使った。節から下をかいた。先から元に引いてかいた。（写真137・138・139）

十六段のものは、長いものをとって来て、一本に十六の節をかいた。（写真140・141）

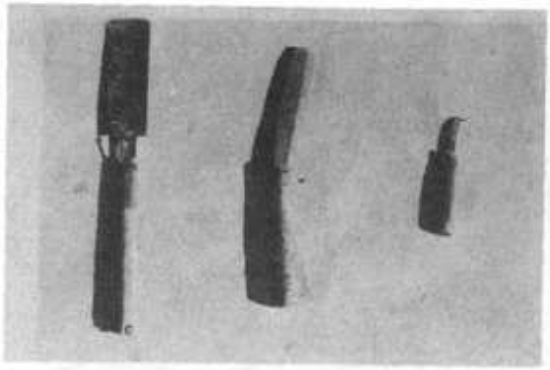


写真136

竹にさすものは、竹の節まで割り、焼いて水につけ、形を出す。ワラでしばっておく。これに長く穂をかいたものと、短かく穂をかいたものを二つつけて飾る。（写真142・143・144）

写真137

写真138

写真 142

写真 139

写真 143

写真 140

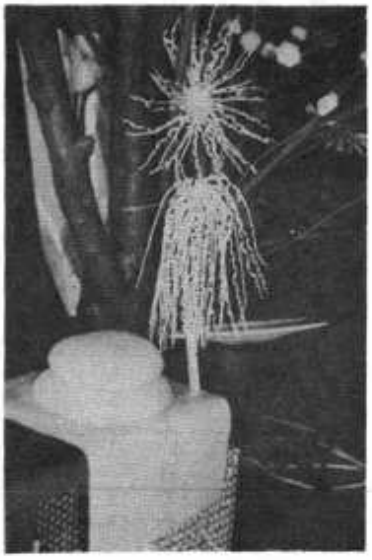


写真 144

写真 141

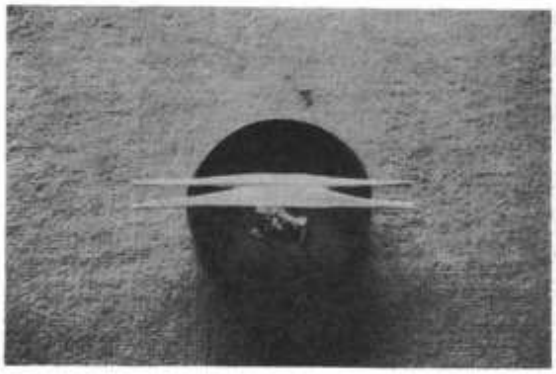


写真 147

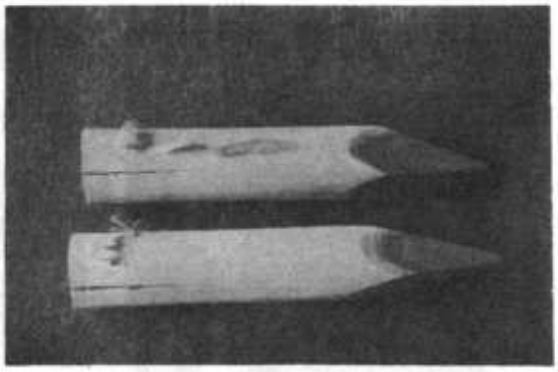


写真 145

カユカキ棒は、オッカドの木を、杭のように削って作る。上部は四つ割りにして置く。(写真145)

ハラミバシは、後藤家では、八組に家族の数だけ作る。ニワトコの木を割り、中央の片方だけふくらませる。(写真146・147)

写真 146

八組の内訳は、神棚に三、仏壇に一、エビス様に一、年神棚に三となっている。

後藤家は、現在六人家族なので、十四組のハラミバシを作っている。

アワボ・ヒエボは、オッカドの木を切ったものを、皮をむいたものを四個(写真148)、むかないものを四個用意し(写真149)、竹を割り火で交差させて曲げた。先端を削った所に、芯をさした。(写真150・151)

農具は作らないが、子持村中郷の後藤京佐氏宅では、エンガ・テンガ・カマを作るとのことである。

木像や農具などを作ることはなかった。

アワ俵・ヒエ俵を作ることもない。カタナも作らない。麻尺は作らない。地区の内で麻を作る家もあるが、聞かないとのことである。

こういった「つくりもの」を作る際には、木の乾き具合が大切で、切ったばかりだと湿っていて切りにくく、乾きすぎると刃が立たなくて切れない。そのため、作る日にあわせて木を切り、切って来た木を置くところも気をつかっている。

写真 148

写真 151

写真 149

写真 150

四、お飾りかえ

飾りかえは、正月十三日に大正月の飾りをはずして行った。はずしたものは、ドンド焼きに持って行った。

ハナのうち、二段のもの（写真152）は、次の所に供えた。神棚・年神棚・仏壇・エビス様・釜神様・馬屋の神・床の間・便所・玄関・門口・屋敷・土蔵・堆肥舎・作業所・井戸神・墓地・道祖神・神社・十二様・オシラ様である。

オシラ様は座敷に飾り、一番大きく作った。年神棚は、昔は方角をみて作ったが、今は神棚と一緒にしている。

マユダマは、コメの粉で作った。昔はクズゴメ・アワ・ヒエ・ソバ・キビ・トウモロコシなどで作った。正月用に挽いておいた粉を使うが、挽く日は決まっていない。

十三日の日に、モチツキと一緒に作る。オシラ様に供えるものが十六で大きいものを作る。年神にはマユの形で、他は丸形のものである。

マユダマ飾りには飾り菓子をさげた。飾り菓子は行商人から買って飾った。正月になってから売りに来た。

マユダマは、かまどでふかして作り、ホケエに入れておく。枝を切って尖らせて、玉をさす。

マユダマ飾りの木は、蚕の時の暖房に使った。燃し始めに使うと良いという。使った方が神様が助けてくれると言われた。

オシラ様のマユダマ用にクワの木を使った家もあった。蚕があたった家のクワの木を盗んで来ると、あたるようになるといい、後藤家では、クワの木を盗まれたことがあるという。

マユダマ飾りは、座敷いっぱいに飾った。（写真153）

写真 153

写真 152

五、年とり（十四日年）

十四日の晩は、オシラマチといい、家ごとに行った。甘酒・酒・食事を用意した。しかし、オミタマサマに上げる「つくりもの」というものはない。

六、道祖神とドンド焼き

道祖神は、子供たちがナラの木で作った。終戦前の話しである。竹の輪を入れて、十～十五メートルの高さに作った。三が日が過ぎてからはじめて、七草の日に完成させた。明治中頃まで、小屋作りをしていたが、火事をおこして、死んだ人が出たことから、道祖神は行われなくなった。十三日の夜、モチツキのあと燃やした。この時の炭を屋根に上げると火防になるという。

子持村の道祖神が終わると、平地の十四日の朝のドンド焼きになり、燃えているのがよくみえたという。

道祖神という「つくりもの」はない。

七、十五日粥（小豆粥）

カユカキ棒で、カユをかき回した。カユカキ棒は、先を四つに割って、モチをうすく切ってはさんでおく。

唱えごとは、特にないが、豊作になるように祈る。

小正月中、このカユカキ棒は、オシラ様の前に供えておく。十六日に片づける。後で水口にさす。

ハラミバシは、ニワトコの木を割って作る。神様の分八組と家の人数分作るが、使ったあとは集めておき、水口に、ゴミが入らないようにと言ってさす。

八、マユダマカキと片づけ

マユカキは、十六日でマユダマをとって袋に入れておく。蚕をはきたてる頃までとっておいて、しるこにして食べた。

十八日には、十八粥をした。十五日粥をとっておき、食べるだけで神様には供えなかった。

小正月の供えものは、二十日正月に、オタナガリで下げた。

ハナは、きれいにして保存し、蚕をかう時、イロリで燃やした。

九、養蚕と「つくりもの」

養蚕と「小正月のつくりもの」との関係は深い。マユダマを作る、オシラ様を祀る、マユダマの木を、蚕の暖房に使った方が良いという点などである。

十、その他

アワボ・ヒエボは堆肥の上に立てる。豊作を祈るものという。この時は新しく堆肥を積みあげる。

アワボ・ヒエボの区別について、後藤家では、「皮をむいたものがアワボ、皮をむかないものがヒエボである」という。また、「アワボ・ヒエボの行事」については聞けなかったが、別の調査の機会にはかつてはあったということであった。

十一、まとめ

後藤家の「つくりもの」は、同地区の他の家々も含めて、時とともに失われつつあると言ってもいいだろう。すでに、毎年「つくりもの」を作ることがなくなっており、「つくりもの」に使うニワトコの木も確保しないようになっている。

「つくりもの」を作る技術は、孫までは伝わっていないようである。

（井野修二）

編集後記

無形文化財の緊急調査は、昭和五十一年度に吾妻郡吾妻町岩島の麻の調査を開始し、翌年度にその報告書『岩島の麻』を刊行して以来、昭和六十年度刊行の『沼田の野鍛冶』に至るまで、すでに九冊の報告書を刊行してきた。消滅の一途をたどろうとしている無形の文化財は数多く、そうした危機感の中でのまさに緊急の調査であったと言える。

昭和六十年度からこの調査は、従来の調査方針を若干変更し、四年計画という壮大な計画のもとで、「小正月のつくりもの」の緊急調査を実施することにした。

「小正月のつくりもの」については、これまでにも多くの研究実績があり（特に、昭和五十二年三月には、群馬県立博物館編『群馬の小正月ツクリモノ』が刊行されている）、また、各市町村でも積極的な調査がなされており、現時点における県内の残存状況は比較的明確に把握することが可能である。

しかし、今回からのように全県的レベルでの包括的総合調査はこれまで試みられたことはなく、その意味ではこの調査の成果に期待するところは大きい。

今回、昭和六十年度調査のまとめとして、『小正月のつくりもの(一)－吾妻編－』を刊行することができたことは大きな喜びであるとともに、今後の調査の一ステップとして、この報告書が民俗研究者はもとより広範囲の方々に利用されることを心から期待するものである。

最後になりましたが、今回調査に御協力いただきました吾妻町の野口保雄さんが、昭和六十一年四月に御逝去されました。謹んで御冥福をお祈りいたします。

（文化財保護課）

○ 参考

群馬県無形文化財緊急調査報告書

昭和五十二年度　岩島の麻
〃　五十三　〃　舟大工と川舟
〃　五十四　〃　伊勢崎の絣
〃　五十五　〃　群馬の藁細工と竹細工
〃　五十六　〃　群馬の屋根葺と壁塗
〃　五十七　〃　群馬の和紙
〃　五十八　〃　手描き紋章
〃　五十九　〃　六合村の木工細工
〃　六十　〃　沼田の野鍛冶
〃　六十一　〃　小正月のつくりもの(一)
―吾妻編―

小正月のつくりもの(一)
―吾妻編―

昭和六十二年三月二十五日　印刷
昭和六十二年三月三十一日　発行

編集　群馬県教育委員会文化財保護課
発行　群馬県教育委員会
〒371　前橋市大手町一丁目一―一
☎　〇二七二(23)一一一一(代表)
印刷　㈲スター商会
高橋市和田多中町一一―三七
☎　〇二七三(23)九八三七